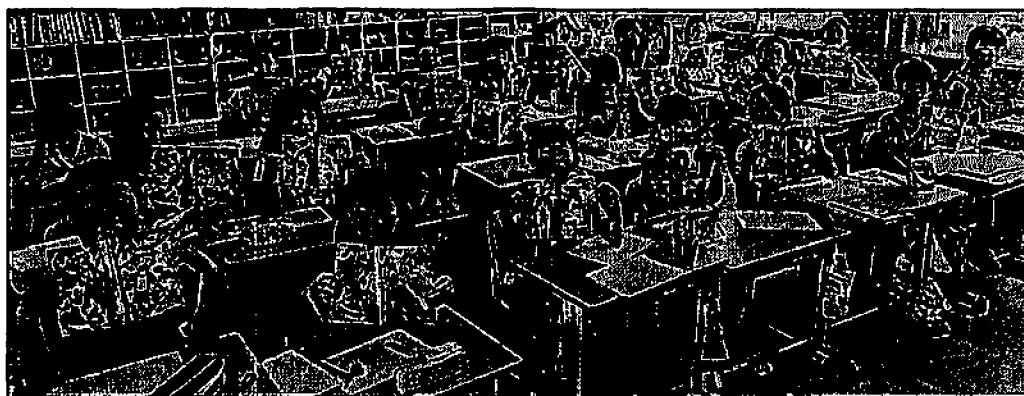


研究主題

自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成
～文集『ひざし』を活用した授業実践を通して～



ひざしプロジェクト

チーム小学校

栄町立布鎌小学校 加藤 友理

印西市立牧の原小学校 杉本あゆみ

佐倉市立小竹小学校 松井 亮

1 研究主題

自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成
～文集『ひざし』を活用した授業実践を通して～

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領から

国語科の目標は「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」である。「書く力」は「表現する力」や「伝え合う力」、「思考力や想像力」などによって形成されるものである。国語科では、付けたい力を明確にし、様々な言語活動を通して児童の能力を育成することが重視されている。本主題は、各校の言語活動において、文集『ひざし』を活用した授業実践を行うことで、特に「表現する力」の育成を目指し、設定されたものである。

また、平成29年3月に公示された、小学校学習指導要領解説 国語編との関わりを見ていくと、教科の目標として、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とされ、3つの目標が挙げられている。その中の、「(3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。」は、国語科において育成を目指す資質・能力の三本柱の一つ、「学びに向かう力、人間性等」に関する目標を示したものである。言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にすることで心を豊かにし、使う言葉が醸し出す味わいを感覚的に捉えることが求められている。

そこで、ひざしプロジェクト（小学校）では、「自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成」を主題として設定し、教材として文集『ひざし』を活用することで、児童自らが「言葉による見方・考え方」を働かせる学びの場を生み出す授業実践を計画していきたい。

(2) 今日的課題から

次期小学校学習指導要領解説 総則編、第3節 教育課程の実施と学習評価の中で、「1 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が示されている。そこには、「平成26年11月20日の中央教育審議会への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」において、具体的な審議事項として、育成すべき資質・能力を確実に育むための学習・指導方法はどうあるべきか、特に今後の「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方についてどのように考えるかを示した。これを受けて、中央教育審議会では、我が国の学校教育の様々な実践や各種の調査結果、学術的な研究成果等を踏まえて検討が行われ、児童に必要な資質・能力を育むための学びの質に着目し、授業改善の取り

組みを活性化していく視点として「主体的・対話的で深い学び」を位置付けた。「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点は、各教科等における優れた授業改善等の取り組みに共通し、かつ普遍的な要素である。」とされている。

また、[主体的・対話的で深い学びの実現を目指して授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが「見方・考え方」である。各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、新しい知識及び技能をすでにもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものであり、習得・活用・探究という学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。]とされている。特に国語科では「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること」を配慮することが求められると示している。

ひざしプロジェクト（小学校）では、文集『ひざし』を活用しながら、各校の目標に向かって、作文や詩を書く言語活動への取り組みを通して、自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成を目指している。仮説である「書こうとする力」は、「主体的な学び」と結び付けられる。それは、[学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点]である。また、「書くことができる力」は、思考・判断・表現の三つの過程の内の一つとして、「精査した情報を基に自分の考えを形成し表現したり、目的や状況等に応じて互いの考えを伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」と結び付けられる。文集『ひざし』を読んだり、作文や詩を書いたり文集にまとめたりする言語活動は、まさにその過程と合致するものであり、言葉による見方・考え方を働かせることで、育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながっていくものと考えている。

（３）児童の実態から

３校に共通する実態として、学級児童数が少ない（牧の原３学年２学級各１９名、布鎌２学年単学級１５名、小竹４学年２学級各２１名）ことが挙げられる。人数が少ないこともあり、学級児童間の仲が良く、学習に意欲的に取り組むことも共通している。学校環境にこそ差はあるが、昨年度の千葉県標準学力検査の結果から、学力面では３校とも平均を上回っており、児童達は落ち着いた環境で学習に励んでいる。

「書くこと」の取り組みについては、昨年度より視写や５分間日記などの日常的な言語活動を行ってきたこともあり、児童達の書く意欲は高まっており、「書くこと」が好きな児童が多い。その反面、自分の思いや考えを、表現を工夫して書くことや、相手に伝わるように文章の構成を考えて書くことが苦手な児童も少なくない。また、語彙の少なさや、感情や様子を表現する言葉の幅が狭いことも挙げられる。

加えて、どの学級にも、生活面や学習面で多くの支援を必要とする児童が在籍している。生活全般において特別な配慮を要する児童や、学習面で個別に支援を要する児童など、児

童ごとの違いはあるものの、授業実践においても配慮が必要なことは共通している。

以上のような児童の実態をふまえ、研究主題の「自分の思いや考えを豊かに表現できる児童の育成」を目指し、3校で共通する取り組みを行い、実践を進めることとした。

（４）「自分の思いや考えを豊かに表現できる」とは

児童に自分の思いや考えを相手に伝えたいという気持ちがあったとしても、それを適切に表現できなければ相手には伝わらない。日常的な言語活動や授業を通して言葉の特徴や使い方を知り、友達と対話していくことによって自分の語彙を量と質の両面から充実させる。そうした活動を繰り返していくことで児童は、言葉によって自分の考えを形成したり、言葉から様々なことを感じたりし、言葉を手がかりにして、より自分の思いや考えが伝わる表現で表すことができるようになるであろう。そのような資質・能力を育成することを目指す。

（５）文集『ひざし』を活用する理由

印旛地区の地域文集『ひざし』を活用する良さは、まず児童の身近なところにある文集であることが挙げられる。作品が共通する身近な題材で書かれていたり、自分と同じような経験が等身大の言葉で表現されていたり、児童にとって共感できる内容や題材が豊富であり、とても親しみやすい文集である。また、自分達が書いた詩や作文を応募できるところも良さである。そのことが、児童のより良い作品を書こうとする意欲へとつながり、掲載作品の多様な題材や多彩な表現からは学ぶことも多い。地域に暮らしている、同世代・同学年の仲間達が日々、何を考え、どんなことを思い、どのような生活をしているかを互いに知り、共有できるところが文集『ひざし』の良さである。

さらに、今年で70号の歴史をもつ文集『ひざし』は、印旛地区に暮らしてきた保護者や、祖父祖母の世代にまで遡る連綿と続く価値をもっており、時代や世代を超えて、三世代にわたって親しまれる文集であることも、文集『ひざし』を活用する理由である。

以下は、文集『ひざし』の歴史的背景である。私達も、偉大な先人達の考え方を受け継ぎ、「児童と共に学び合うための文集」として、文集『ひざし』を活用していきたい。

印旛地域子ども文集『ひざし』……その価値を再認識していただきたい。

戦後の生活綴り方運動は、昭和25年「日本綴方の会」が誕生して再開された。翌年「日本作文の会」と改称し、この会を中心に活発な活動を展開しながら今日に及んでいる。

『ひざし』の発刊は昭和22年であり、当時の印旛の国語教育に携わる教師の多くが、戦後いち早く、子ども達の将来のために、ものの考え方・感じ方・生き方を育て、文章力を高める作文教育を重視していたことが分かる。当時から『ひざし』は、政治的思想を越えて、子ども達が共に学び合うための文集であり、成長を共に促す教育資源となっている。さらに、印旛地区の子ども文化、教育文化の足跡と言っても過言ではないだろう。

戦後、多くの団体で作文指導が重要視されているが、これほど永い歴史を持つ文集は他にない。発行号数が多い柏市『かつしか』横浜市『よこはま』などは、日本作文の会が出来てからの創刊であろう。藤沢市の小学校文集『わかふじ』も昭和26年、中学校

文集『砂丘』は昭和24年創刊である。生活綴り方が盛んであった東北に目をやると弘前市の『ひろさき』は、昭和37年頃の創刊である。もちろん、これ以外に小さな団体の文集は、他にもあるかもしれないが、地域の小中学校で作品を集め、地区の教職員がボランティア体制で支え続けている編集文集は他にないだろう。昭和22年度創刊、平成27年度で第68号という実績は、日本国語教育界において、きわめて偉大な轍である。この事実を印旛教育に携わる我々がしっかりと受け継ぎ、後世に引き継いでいきたいと考えるのである。

3 研究仮説について

仮説①日常的に言語活動の工夫を行うことで、「書こうとする力」が育ち、進んで表現しようとする態度が養われるだろう。

まず、児童が書きたいと思う気持ちがなければ、表現ができない。そこで、日常的に様々な言語活動を取り入れていくことで、児童の書く活動への抵抗感がなくなり、書く意欲が高まるだろう。また、日常的に書く活動を繰り返し行なうことで、国語の学習においてもすぐに書く活動に取り組むことができるようになると考えた。そこで、以下のような言語活動を行なった。

<学校での言語活動>

- ・ 5分間作文・日記 ・ ・ ・ 限られた時間の中で、できるだけ詳しく書いたり、伝えたいことを端的に表現したりするなど、日常的に書く活動を取り入れていく。また、教師による前向きなコメントや返事をつけることによって、書こうとする力が伸びていくだろう。
- ・ 日直による詩の発表 ・ ・ ・ 発表する詩を自分で選ぶことで、たくさんの作品を読み、いろいろな表現を身に付けることができるだろう。
- ・ 句会 ・ ・ ・ 十七音の中で表現する言葉を吟味する力が伸びていくだろう。
- ・ ポエムレストラン ・ ・ ・ 聞いてもらうために自分の詩を書きたいという気持ちが高まり、進んで書こうとする力が伸びるだろう。
- ・ 並行読書 ・ ・ ・ 学習に必要な表現力や書き方を知ることができるだろう。
- ・ 読書や授業後の感想 ・ ・ ・ 短い言葉で自分の考えや思いを書くことができるだろう。さらに、感想に対して教師や友達からの返事をもらうことで、書きたいという気持ちが高まるだろう。

<家庭学習での言語活動>

- ・ 視写 ・ ・ ・ 毎日続けることで、文字を書くことや文章の構成の仕方に慣れていくだろう。
- ・ 週末の日記 ・ ・ ・ 書いた作品を学級だよりに掲載することで、読んでもらえる喜びを知り、書こうとする力が伸びるだろう。

仮説②文集『ひざし』を教材として活用することで、「書くことができる力」が育ち、表現力が高まるだろう。

書く意欲だけ持っていてはどう書いていいかわからなければ思いは伝わらない。より適切に思いを伝えるためには、よりよく表現する力が必要である。よりよく表現するためには、文章の構成やどのような言葉を使ったらよいのか（豊かな語彙）、どのような書き方をすればよいのかという表現の工夫について考え、力を身につけなければならない。

＜ひざしの活用の仕方＞

○文集『ひざし』コーナーを作り、いつでも優れた作文や詩を読めるようにする。

- ・ 共通の作品について分析をする。作者が伝えたいことは何かを考えさせ、そのためにどのような文章の構成になっているかを確認する。
- ・ 自分の題材選びの参考にする。
- ・ 文集『ひざし』の中の作品を視写したり読んだりし、語彙の量を増やしたり、優れた文章表現「光る言葉」を探したりする。それを「光る言葉の木」として教室内に掲示し、自分の作品に活かせるようにする。
- ・ 言葉や文章の対する感想や意見を伝え合い、互いの文章の内容や表現のよいところを見付ける。（共有）

＜表現の工夫＞

○文の構成

- ・ 文集『ひざし』をモデル文として、段落や「はじめ—中—終わり」の構成を学ぶ。伝えたいことの中心がはっきりするように段落の並び替えを行う。

○書き方（「光る言葉」）

- ・ 効果的な会話文
- ・ 体言止めや比喩表現、擬態語など

※児童にわかりやすいように、「光る言葉」という表現を使うが、言葉だけでなく、文章表現についても「光る言葉」として取り上げる。

例）「嬉しい」、「楽しい」、「悲しい」などの言葉ではなく、「まるでメダルをもらったように心があつくなった」、「ピョンピョン、ジャンプしたくなった」、「心臓がドクドクして目の前が暗くなった」などのように、動作や比喩、擬態語などを使う。

实践

—詩—

第2学年

1 単元名

みじかい言葉で

～布鎌小『のはらうた』をつくろう～

2 単元について

(1) 単元観

本単元で扱う内容について、学習指導要領には衣かのように位置付けられている。

「B書くこと」の(2)内容 ①指導事項

(1) ア 経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること。

ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。

オ 書いたものを読み合い、よいところを見付けて感想を伝え合うこと。

[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]

(1) ア 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。

本単元は、生き物の視点を短い言葉でまとめ、自分だけの詩を書く学習である。単元を貫く言語活動は、「布鎌小のはらうたをつくろう」である。詩を書くのは初めての経験であり、短い言葉で書くことは低学年にとってはとても難しいと考える。そこで、最初に『のはらうた』を紹介していく。『のはらうた』は、身近な植物や生き物の視点から書かれており、児童にとってはとても親しみやすい作品ばかりである。そして、単元のゴールを布鎌小の周りにいる生き物になりきり、オリジナルのはらうたを作ろうとする。生き物になりきることで、詩を書くことが難しいという抵抗感が低くなるだろうと考えた。しかし、どんなに抵抗感が低くなったとしても語彙力がなければ、イメージをふくらませて作品を作り上げることは難しいだろう。そこで、文集『ひざし』を活用し、語彙力をつけさせていきたいと考えた。文集『ひざし』の中から、擬音語や擬態語、比喻表現を「ひかる言葉」として、探す活動を行う。見つけた「ひかる言葉」は「ひかる言葉の木」として掲示して、いつでも見られるような環境を設定していく。「ひかる言葉」の定義をはっきりさせることで、児童の読む視点も明確になるだろうと考えた。そして、たくさんの詩を読みながら自然と書きぶりや技法なども身に付けることができるだろうと考えた。

(2) 児童の実態

本学級の児童は、男子10名、女子6名、計16名で構成されており、とても明るく素直である。1年生からのクラス替えもなく、全員がとても仲良く過ごすことができている。学習に対してとても意欲的で、何事にも前向きに取り組んでいる。ただ、集中力が低く、話を最後まで聞くことが苦手な児童や理解力が低い児童が数名いる。

本単元を指導するにあたり，児童に行った実態調査の結果は以下の通りである。

2年1組（調査人数 男子9名 女子6名 合計15名）

（仮説①「書こうとする力」に関連して）

① 日記（詩）を書くことは好きですか。また，作文を書くことは好きですか。

好き	10名	まあまあ好き	3名
あまり好きではない	1名	嫌い	1名

〔主な理由〕

絵を描くのが好きだから	5名
ア 楽しかったことをいろんな人に知らせられるから	8名
イ いろんな言葉を覚えられるから	3名
ウ その日にあったことを思い出せるから	1名
エ 日記を書くとスッキリするから	1名
オ 書く自信がないから	1名
カ 字や絵をかくのが好きではないから	1名

（仮説②「書くことができる力」に関連して）

② 詩を書いてみたいと思いますか。

思う	9名	少し思う	4名
あまり思わない	0名	思わない	2名

〔主な理由〕

ア 自分の詩を発表したいから	6名
イ 楽しそうだから	2名
ウ 難しそうだけど書いてみたい	4名
エ いろいろなものを詩にしてみたい	1名
オ ちょっと難しそうだから	2名

（目的意識・相手意識に関連して）

③ 作文（詩）を書いたら，誰に読んでほしいですか。理由も書きましょう。

・お家の人	12名
・友だち	4名
・先生	2名

〔主な理由〕

・喜んでもらいたい。ほめてもらいたい。	14名
・感想を聞きたいから。	1名

（光る言葉に関連して）

⑤ 「海」と聞いて，どんな様子の言葉を思いうかべますか。

・魚	8名	・きれい	2名	・夕日	1名
・波の音	5名	・まぶしい	2名	・船	1名

・貝殻 3名 ・砂浜 1名 ・サラサラ 1名

⑥ 「たんぼ」と聞いて、どんな様子の言葉を思いうかべますか。

・ザリガニ 5名 ・かえる 2名 ・ふさふさ 1名
 ・米 5名 ・メダカ 2名 ・ドボドボ 1名
 ・稲 4名 ・鳥 1名

上記の調査についての個々の児童の実態は、下記の表の通りである。

①日記（主に週末の宿題）を書くことは好きか。

②詩を書いてみたいと思うか。

③詩を書いたら、誰に聞いてほしいか。

④・⑤「光る言葉」（擬音語・擬態語・比喩表現）が書けている。

（A好き Bどちらかというとき Cどちらかというときではない D好きではない）

	①	理由	②	理由	③	④	⑤
A児	D	カ	思う	イ	家族	×	×
B児	C	オ	思う	ア	先生	×	×
C児	A	ア	思う	イ	家族	×	×
D児	A	ウ	思う	ア	家族	×	○
E児	B	ア	思わない	オ	家族	×	×
F児	A	ア	思う	ア	家族	○	○
G児	A	ア	思う	ア	家族	×	×
H児	B	ア	少し思う	ウ	家族	×	×
I児	A	イ	思う	ア	家族	×	×
J児	A	ア	思わない	オ	友達	×	×
K児	A	ア	少し思う	ウ	家族	×	×
L児	A	ア	思う	エ	友達	×	×
M児	A	イ	少し思う	ウ	家族	×	×
N児	B	エ	思う	ア	家族	×	×
O児	A	イ	少し思う	ウ	家族	×	×

以上のような結果から、ほとんどの児童が書く活動が好きであることがわかる。2年生から日記の学習が始まり、週末の宿題として日記を書いてきた。日記の内容は、遊んだことや習い事、出かけたことなどが多い。自分がしたこと、その時の気持ちが書かれている。会話文を入れたり、擬音語や擬態語を使っている児童はほとんどいない。また、2ページにわたり書いてくる児童は数名で、ほとんどの児童がノートの半分をやっと書ける程度である。

4月から言語活動の一つとして、月ごとに何編かの詩の紹介し、その詩の音

読を行ってきた。また、全校集会では各学年の群読発表があり、たくさんの詩と触れ合ってきている。そのため、自分たちでも詩を書いてみたいという意欲が高くなっていると考える。

書きたいという意欲はとても高いが、語彙力が低いことがわかる。「海」や「たんぼ」と聞いてどんな様子の言葉を思いうかべるかという質問に対して、様子を表す言葉ではなく、魚や貝殻、かえるなど、それぞれの場所にいる生き物やある物を書く児童がほとんどであった。途中、擬音語や擬態語の例を教えたが、それでも擬音語を書いたのは2名である。さらに、比喻表現を書いた児童は誰もいなかった。

(3) 指導観

○単元を貫く言語活動を設定し、目的意識を持たせる。

アンケート結果から、もちろん低学年ということもあるが、本学級の児童の語彙力が低いことがわかる。意欲はとても高く、詩を書いてみたいという気持ちは強く持っている。しかし、語彙力が育っていなければ、ただ見たものや感じたことを短い言葉でリズムよく表現することは難しいと考える。

そこで、本単元では、ひざしを活用し、児童の語彙力を育てていく。第一次では、学習計画を立て、見通しを持たせる。工藤直子さんの「のはらうた」の作品を紹介し、詩のよさや特徴を捉えさせていく。また、「のはらうた」布鎌小バージョンを作り、お家の人や友達に紹介するというゴールを知らせることで、目的意識を持って最後まで意欲的に取り組むことができるだろう。

○文集『ひざし』を活用し、言葉集めを行い、作品に取り入れる。

第二次では、自分のオリジナルの「のはらうた」の作成に取り組んでいく。しかし、いきなり詩を書くのはとても難しい。そこで、ただ事実だけを並べた詩を提示し、その詩に「ひざし」から集めた「ひかる言葉」を活用し、様子を表す言葉や比喻表現を書き加えさせていく。最初の詩や友だちの詩と比べ、表現方法や言葉一つでいろいろな詩ができることを味あわせたい。そして、次に自分だけ「のはらうた」を作成していく。

○交流を通して、相手意識を持たせる。

第三次では、「ポエムレストラン」を開催し、自分の作った詩を紹介する場を設定する。紹介するだけでなく、自分の詩の中の「ひかる言葉」や「工夫した言葉」も紹介させる。この紹介を加えることで自分の中の「ひかる言葉」が生まれ、より語彙力が養われていくだろう。

3 仮説との関わり

仮説①日常的に言語活動の工夫を行うことで、「書こうとする力」が育ち、進んで表現しようとする態度が養われるだろう。

「書こうとする力」＝書こうとする意欲面（主体的に表現しようとする態度）

本学級では、週末に日記を書くことが決まりになっている。児童の中には、終末以外にも進んで日記を書く児童がいる。そして、書いてきた日記を定期的に読み合う時間を設定している。読み合う場を設定することで自分の書いたことを相手に伝えられる充実感を得ることができ、より「書こうとする力」が身に付くと考えた。

また、今回の授業では、工藤直子さんの「のはらうた」の布鎌小バージョンを作ろうという最終ゴールを設定した。そこで、教室に「のはらうた」の本を掲示し、いつでも手に取れるようにし、並行読書を行う。朝の会では日直が自分のお気に入りの詩を発表する場を設定している。たくさんの詩の作品に出会う中で自分もこんな作品を作ってみたいという気持ちが育つだろうと考えた。また、気に入った詩を紹介する「ポエムレストラン」を開催する。1回目は、「のはらうた」から選んだ作品を紹介し、2回目には自分で作った詩を紹介していく。このポエムレストランを行うことで、相手に楽しんでほしい、よりよい作品を作りたいという気持ちが芽生え、「書こうとする力」が育つと考える。

仮説②ひざしを教材として活用することで、「書くことができる力」が育ち、表現力が高まるだろう。

「書くことができる力」＝書く技術面（文章構成力、語彙力、表現の工夫をする力）

低学年ということもあり、本学級の児童は語彙力が乏しい。そこで、ひざしの作品を読み、よい表現方法や語彙を見つけていく。同じ学年の作品を読むことで、より身近で使いやすい表現方法を身に付けられると考える。最初は、全員で同じひざしの中から同じ詩を読み、どの表現がよいのか話し合いの場を設定する。そこで、比喻や繰り返しの言葉、さまざまな様子を表す言葉など、視点をはっきりとさせる。その後は並行読書のようにひざしを持ち帰り、個々人でよりよい表現を探していく活動へとつなげていく。そして、自分たちで見つけたよい表現方法や言葉を「ひかる言葉の木」として掲示をし、いつでも目に見える環境をつくる。このようにひざしを活用し、語彙力や表現方法を学習することで、自分たちが作る詩にも活用することができると考える。

4 単元の目標

【関心・意欲・態度】

- ・生きものになりきり、短い言葉で表現しようとする。

【書くこと】

- ・生きものの特徴をつかみ、様子が伝わるような言葉を集め、短い文章を書くことができる。
- ・自分で作った詩やお気に入りの詩を紹介することができる。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

- ・ものの様子や形などの特徴を捉えて表現できる。

5 指導計画 6時間扱い（本時3／6）

次	学習内容と学習活動	評価規準
第一 次 (2)	○学習計画を立て、見通しをもつ。 ・「のはらうた」の作品を読む。 ・詩の特徴について話し合う。 ・学習の流れを知る。 ○「ひかる言葉」の見つけ方を知る。	・「のはらうた」を読み、これからの学習に意欲的に取り組もうとしている。 【関・意・態】（話し合い・ノート）

	・「ひかる言葉」とは、擬音語や擬態語 比喩表現などであることを知る。	
常時	○「ひざし」を読み、「ひかる言葉」を みつけ、掲示していく。 ○「のはらうた」を読み、気に入った詩 を紹介する。	
第 二 次 (3) 本時	○ポエムレストランを開く。 ・「のはらうた」から選んだ自分のお気 に入りの詩を紹介する。 ○よりよい詩にするにはどうしたらよ いか話し合う。 ・例示された詩に「ひかる言葉」を書き 加え、それぞれの詩の良さについて話 し合う。 ○自分の「のはらうた」を書こう。 ・なりたい生きものを決め、自分の「の はらうた」を書く。	・気に入った理由を加えて、詩を紹介す ることができる。 【話す・聞く】（発言） ・「ひかる言葉」の木を活用し、よりよ い詩を書くことができる。 【書く】（ワークシート） ・自分の詩を書くことができる。 【書く】（作品）
第 三 次 (1)	○ポエムレストランを開く。 ・自分たちがつくった「のはらうた」を 紹介する。	・自分たちが作った詩を紹介することが できる。 【話す・聞く】（発表・ワークシート）

6 本時の指導

(1) 目標

【関心・意欲・態度】

- ・「ひかる言葉」の木から詩に合った言葉を選定しようとする。

【書くこと】

- ・「ひかる言葉」の木から言葉を選び詩に書き加えることができる。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

- ・「ひかる言葉」加えるとよりよい詩になることに気付くことができる。

(2) 展開

○十分に満足できると判断される状況 △努力を要する状況への手立て

時配	学習内容と学習活動	指導・支援（◇）と評価（◎）	学習材
2	1 学習計画表を見て、本時の位 置付けを確認し、めあてをつ かむ。	◇学習計画表の掲示物を見て、位 置付けを確認する。	学習計画表

5	2 例示の詩を読み，話し合う。 ・読んだ感想を発表する。 ・もっとこの詩をよくするためには何が必要か話し合う	◇詩を読んだ感想をもとに，どうしたらもっと楽しい詩になるか考えさせる。 ◇今まで読んできた作品と比べさせる。	例示の詩
3	3 学習問題を設定する。		
	「ひかる言ば」の木をつかって，詩を書こう。		ひかる言葉の木
1 5	4 グループごとに詩に言葉を書き加える。 ・ワークシートの詩に「ひかる言葉」を書き加える。 ・どの言葉をどの部分に使うか話し合う。	◇どんな言葉がこの詩に合うのかを話し合ってから，話し合いを始めさせる。 ◎「ひかる言葉」の木から，言葉を選定し，よりよい詩を書こうとしているか。 【書く】（ワークシート） ○例示の詩に合った言葉を選ぼうとしている。 △詩から言葉をイメージさせる。	ワークシート
1 5	5 グループごとに完成した詩を発表する。 ＜発表者＞ ・どんな工夫をしたのか。 ・「ひかる言葉」を選んだ理由 ＜聞き手＞ ・最初の詩と比べてどんな変化があったか。 ・他のグループと比べてどんな違いがあったか。	◇発表者と聞き手のそれぞれに視点を与える。 ◇全員がよく見えるように各グループの作品を実物投影機でテレビに映す。	実物投影機
5	6 授業を振り返り，感想を書く ・今日の学習で学んだこと。	◇「ひかる言葉」を書き加えると詩がどのように変化したのかに着目させてから，感想を書かせる。	

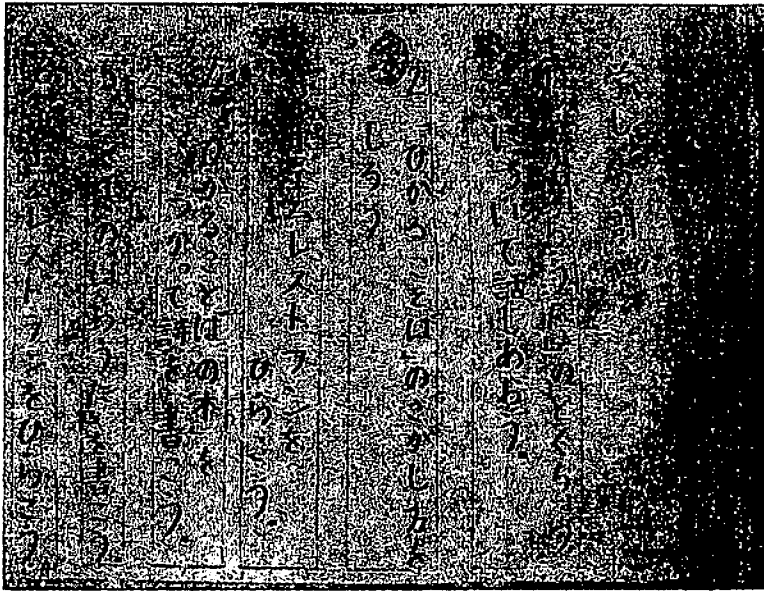
2年生の実践 「みじかい言葉で」～布鎌小『のはらうた』をつくろう～

<仮説1について>

手立て①単元を貫く言語活動の設定

○まず、学習計画を立てて学習の見通しを持たせることで、一人ひとりに目的意識を持たせた。そして、布鎌小『のはらうた』をつくるというゴールを設定した。単元を貫く言語活動を設定することで、そのゴールに向けて書こうする意欲が高まっていった。

<学習計画表>



※いつでも見られるように教室の前面に掲示をした。

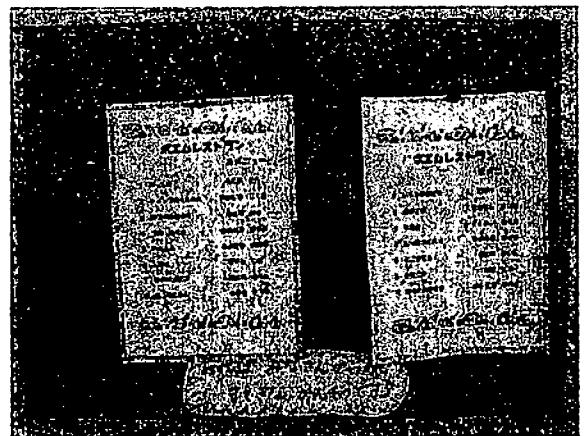
学習の後、生き物の絵を貼ることで、今学習のどこまで終えたかがわかるようにした。

少しずつ、ゴールに向かっていくことが視覚的に捉えられるようにした。

手立て②ポエムレストランの開催

○ポエムレストランとは、聞き手であるお客さんが詩を注文し、発表者は料理人として自分の詩を紹介するという活動である。初めての活動であったが、児童はとても楽しそうに活動することができていた。楽しいだけでなく、相手意識を持って読むことで、読み方にも工夫が見られた。そして、自分の作った詩をたくさんの人に聞いて欲しいと書こうとする力の高まりが見られた。

<ポエムレストランの様子>



※入口には看板やメニュー表を掲示した。メニュー表はコルクボードにつけた方がお店らしくなるというアイデアが児童から出てきた。

<ポエムレストランの流れ>



①メニュー表から詩を選んでもらう。



②ウエイトレス役の児童が注文を受ける。



③注文を受けた料理人役が詩を発表する。



④お客さんから感想（お代）をもらう。

<児童の感想>

A児の感想

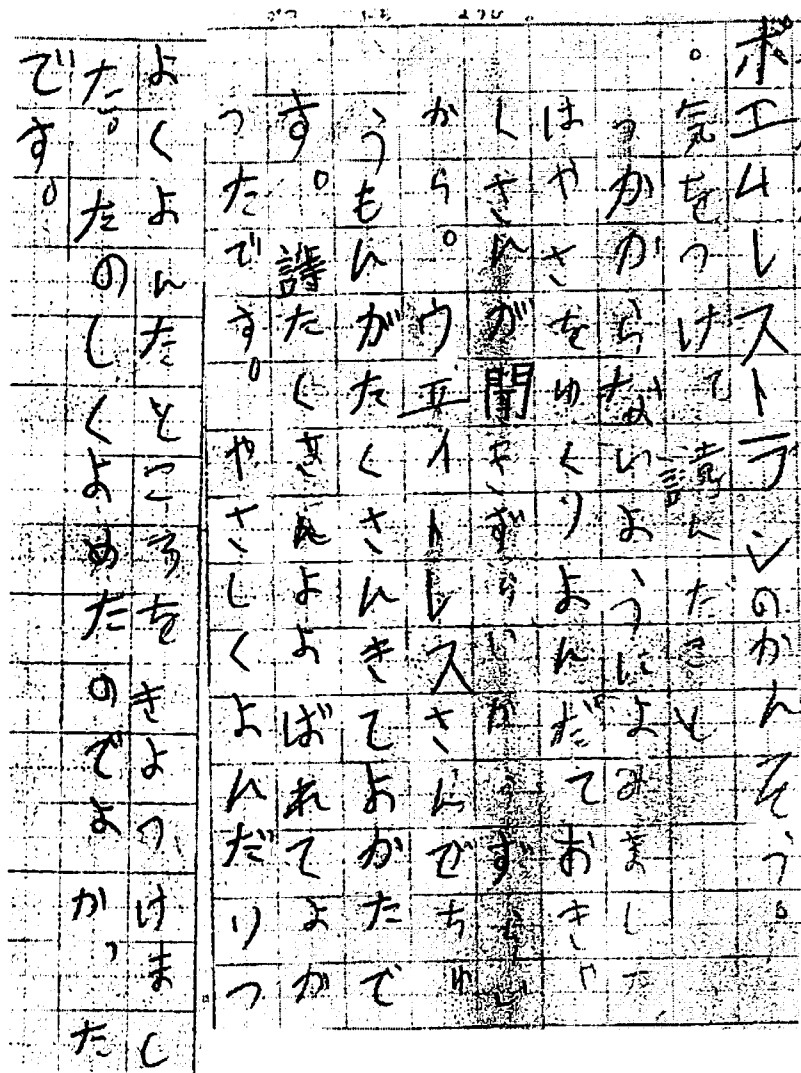
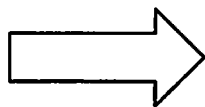
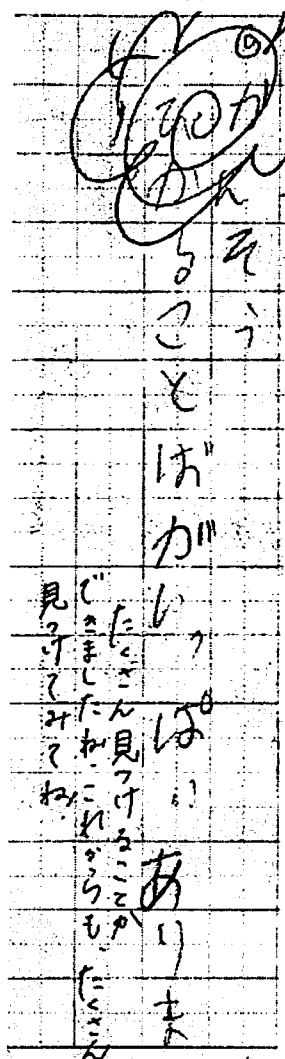
自分の力がたかさんだせてよかった
 でした。つぎのポエムレストランも
 がんばりたいです。つぎのマン
 のはらうたもたくさんかきたいで
 す。

B児の感想

しにでム
 み書すレマ
 にじ°スイ
 してゴトの
 てボイラは
 たエのソラ
 のムはでう
 ししら人た
 もスう気も
 うトたにつ
 とラもなく
 思ンじる
 もとて
 てたういポ
 じのずいエ

※A児、B児ともに「ポエムレストラン」を終えて、次のポエムレストランへ向けて、詩を書いてみたいという意欲が高まっている。

自分の思いを書くのが苦手なC児の感想



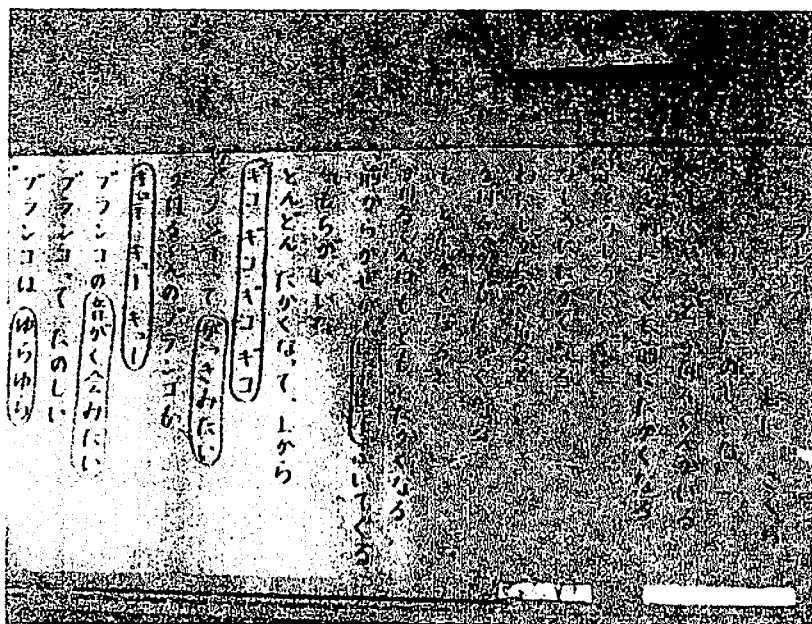
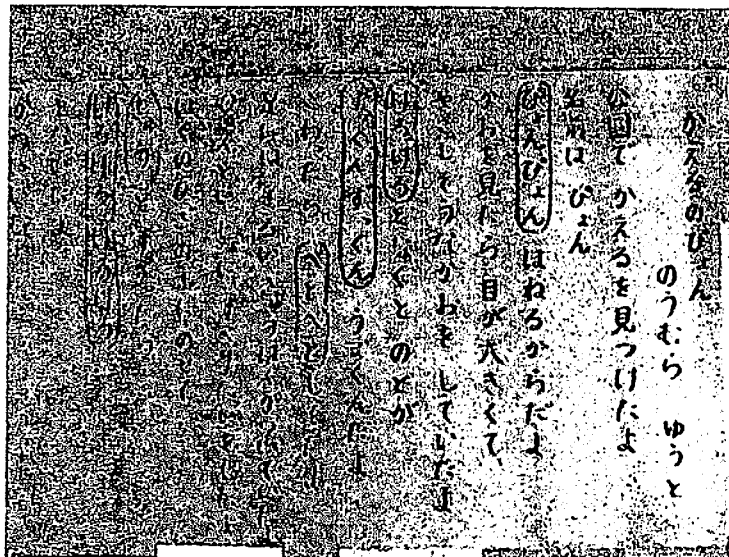
※C児は書くことがとても苦手である。これまでも授業の感想はひと言しか書くことができなかった。しかし、ポエムレストランはとても楽しかったようで夢中で感想を書く姿が見られた。内容としても、読むときに気を付けたことが書いてあり、相手意識をしっかりとって学習できたことがわかる。C児もまたポエムレストランがやりたいと学習に対しての意欲が高くなった。

<仮説2について>

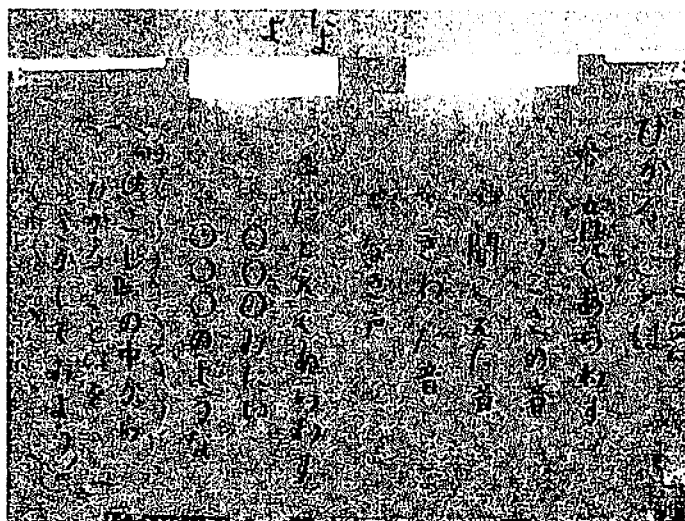
手立て③文集『ひざし』の活用

○「ひかる言葉」と言われても児童にとっては抽象的で難しい。そこで、今回「ひかる言葉」とは擬音語や擬態語、比喩表現の2点に絞って考えることとした。第1次で文集『ひざし』の中から同学年の児童の詩を2点モデルとして提示した。その詩の中にある「ひかる言葉」はどの言葉かを全員で話し合い、「ひかる言葉」の定義について確認をした。

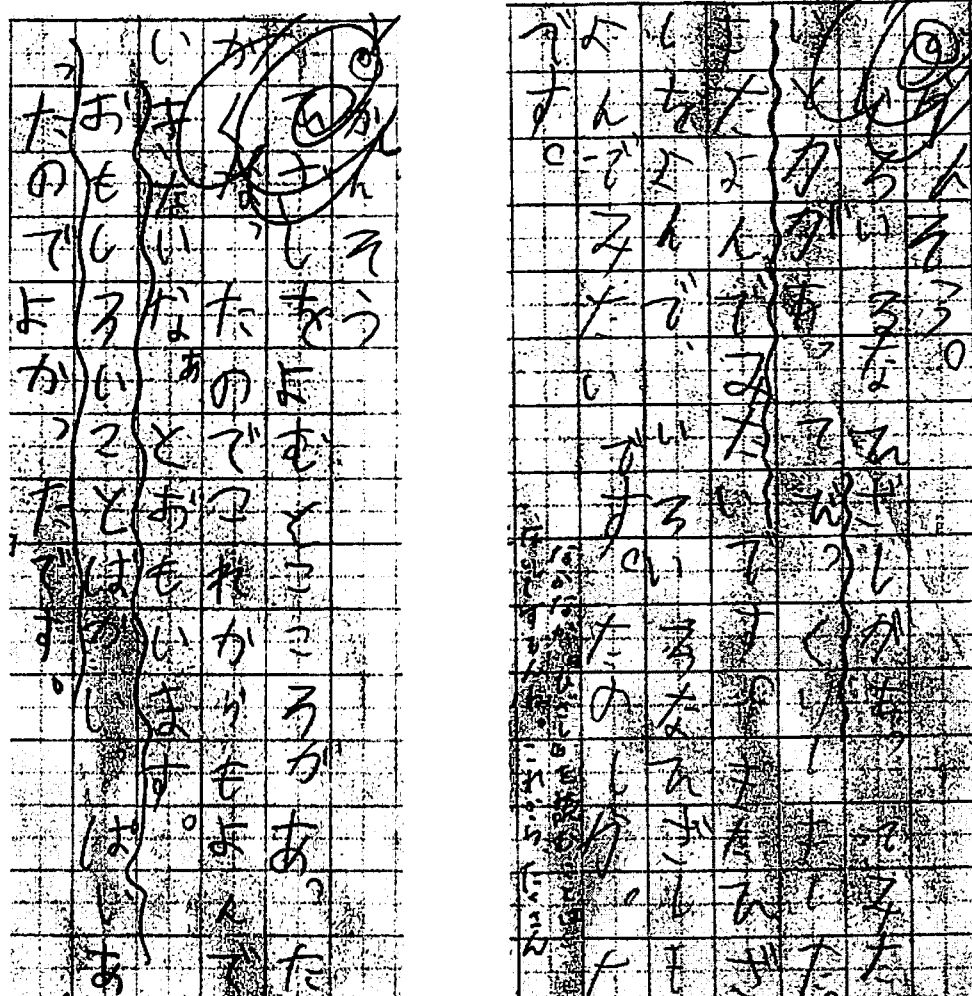
<文集『ひさし』より選んだ詩>



<2つの詩を読み話し合いをした結果決まった「ひかる言葉」の定式>



<文集『ひざし』を読んだ児童の感想>

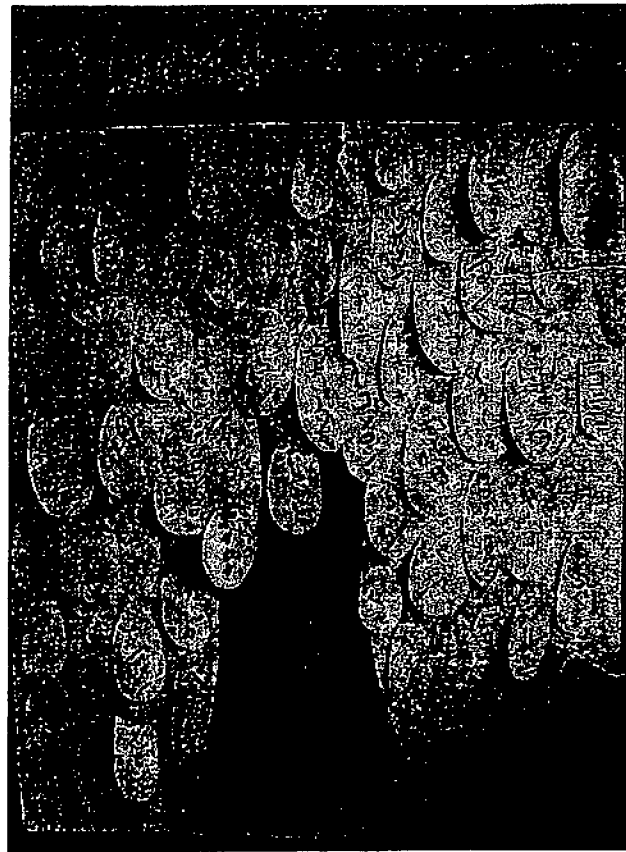
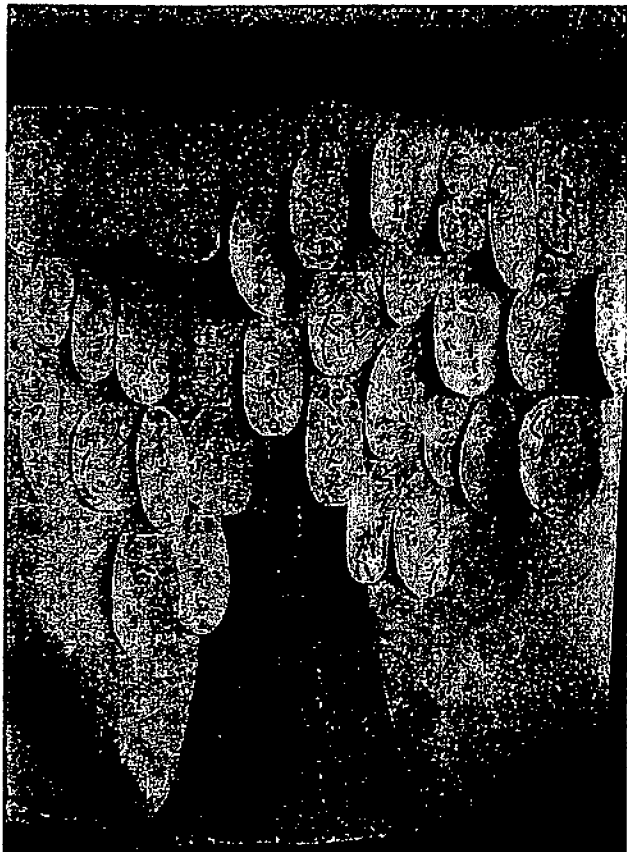


※児童の感想からは、文集『ひざし』を初めて読んだという感想がたくさん出ていた。確かに、児童が進んで文集『ひざし』を手にとることはあまりないと思う。ただ、教師の呼びかけ一つで児童は文集『ひざし』を読んでみたいという関心が高まることを実感した。きっかけを与えてあげると、児童は進んで文集『ひざし』を手にとるようになっていった。やはり、文集『ひざし』には、同じ学年の児童の作品が載っており、親近感をもちながら読み進める児童の姿が見られた。文集『ひざし』を読む中で、自分も作品を書いてみたいという気持ちが自然に芽生えてきた。また、今回は「ひかる言葉」探しという目的が明確化しており、読むのが苦手な児童も読み進めることができたと考える。

手立て④「ひかる言葉」の木の掲示・活用

○文集『ひざし』から見つけ出した「ひかる言葉」を書き出し、「ひかる言葉の木」として掲示した。進んで文集『ひざし』を手に取り、読み進める児童が増えた。擬音語・擬態語はすぐに見つけることができたが、比喩表現を探しだすのは難しい様子だった。しかし、日を迫うごとに比喩表現にも目を向けて読むことができるようになってきた。

<ひかる言葉の木>



※比喩表現の木と擬音・擬態語の木と2種類の木に分けて掲示をした。2種類の木を作ることで、児童が「ひかる言葉」を探す視点が明確になった。

○本時では、教師が作成した「ひかる言葉」が入っていない詩を提示し、各グループで「ひかる言葉の木」を使って、「ひかる言葉」を付け加えた。どこに「ひかる言葉」を書き加えるか迷うグループはなく、「ひかる言葉の木」に集まり、詩に合う「ひかる言葉」を見つけだしていた。グループによっては、自分たちで考えた「ひかる言葉」を付け加えている姿も見られた。学習の最後には、各グループが作った詩を発表した。最初の詩と比べて聞くことができ、どの児童の感想からも「ひかる言葉」がある詩の方がよいと感じていることがわかった。今回は5グループで活動をしたが、どのグループもいろいろな「ひかる言葉」を付け加え、個性豊かな詩が出来上がった。

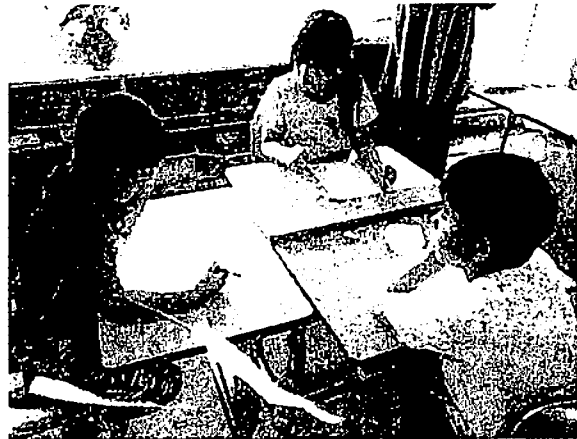
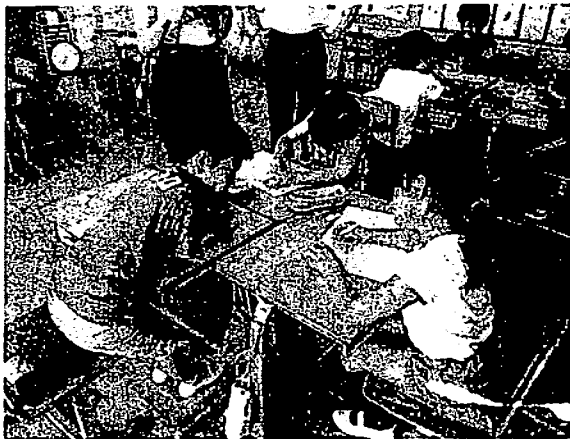
<教師作成のモデル>

おれのじまん それは このはさみだ てきが きたら ポーズするのさ てきは あつというまに にげていく つよいだろ どうだ はさみ ほしくなっただろ？	おれのじまん それは このはさみだ えものがきたら つかまえるのさ すごいだろ	おれのじまん それは このはさみだ みてみる こんな おとが なるんだぜ かっこいいだろ	おれのじまん さがりに あばたろう
---	---	--	----------------------

<「ひかる言葉の木」から選ぶ児童>



<各グループで「ひかる言葉」をどこに付け加えるか話し合う>



<できあがった作品をグループごとに発表>



<児童の感想>

と、か、き、か、し、の、に、
思、る、て、は、う、な、ひ、
い、こ、き、ひ、き、音、か、て、る、
ま、と、た、か、い、あ、か、て、る、
す、ば、い、る、れ、あ、か、て、る、
。、か、す、と、は、あ、る、い、
な、。、は、う、な、い、と、い、
。、を、あ、か、い、れ、
あ、ん、ど、あ、か、い、れ、
い、ん、か、い、れ、い、
れ、詩、々、わ、わ、い、
た、い、も、す、る、と、
い、い、い、い、と、

の、て、さ、し、は、な、も、
は、き、れ、だ、か、ら、う、か、
な、だ、い、な、あ、た、な、
う、と、な、と、あ、る、
た、い、い、鬼、そ、た、と、
し、い、か、し、と、い、ば、と、
も、き、る、ま、て、ど、か、は、
す、し、こ、し、も、あ、る、か、
と、た、と、ん、の、あ、く、な、
き、。、ば、。、だ、と、て、し、
か、み、が、ど、つ、わ、さ、か、
か、ん、あ、の、す、だ、み、と、
い、な、は、て、し、り、
る、が、て、ん、き、と、そ、
の、イ、い、も、な、と、

※児童の感想からは、「ひかる言葉」ある詩とない詩では、感じ方が違うことに気付いたことが書かれていた。そして、自分たちが書く詩にも「ひかる言葉」を入れていきたいという書こうとする力が育っていることがわかる。

<各グループが作った詩>

どうだ、はさみ、ほしくなっただろ？

つよいだろ

てきはぐあつというまに にげていく

ポーズするのさ

てきが きたら
わ、こ、い、い

それはくこのはさみだ
ちき、ンと、
あ、

おれの じまん

えものがきたら
い、ん、じ、つ、
た、い、に、か、ち、ん、と
つかまえるのさ

それは このはさみだ

おれの じまん

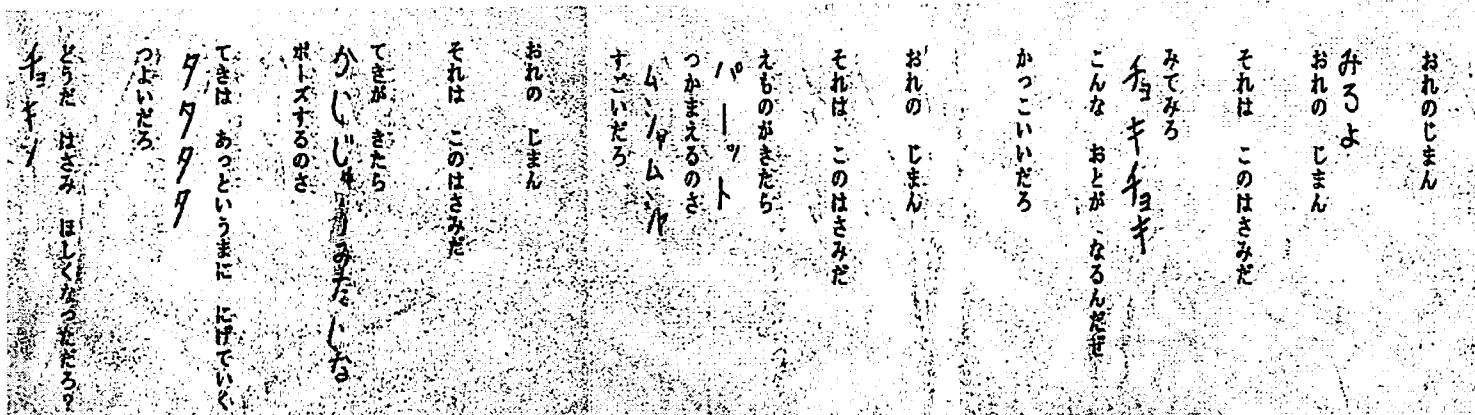
こんな おとが なるんだぜ
ワキ、ワキ、ち、と、キ、ん
かつこいだろ

みてみる

それはくこのはさみだ
ちき、ンと、
あ、

おれの じまん

おれの じまん



手立て⑤マイのはらうたを作り、友だち同士で推敲する

○これまで、『のはらうた』や文集『ひざし』をたくさん読んできたが、実際に詩を書くとなると苦手な児童が出てきたり、事実の羅列になってしまったりするだとうと考えた。そこで、書いた詩をグループごとに見合い、ひかる言葉が入っているかどこの言葉を短くすればよいかを話し合わせる時間を設定した。最初は、「ひかる言葉」が入っていなかった詩にもみんなで考えた「ひかる言葉」を入れることでよりよい「のはらうた」を完成することができた。

<『のはらうた』づくり>

A児の作品

題材：トカゲ

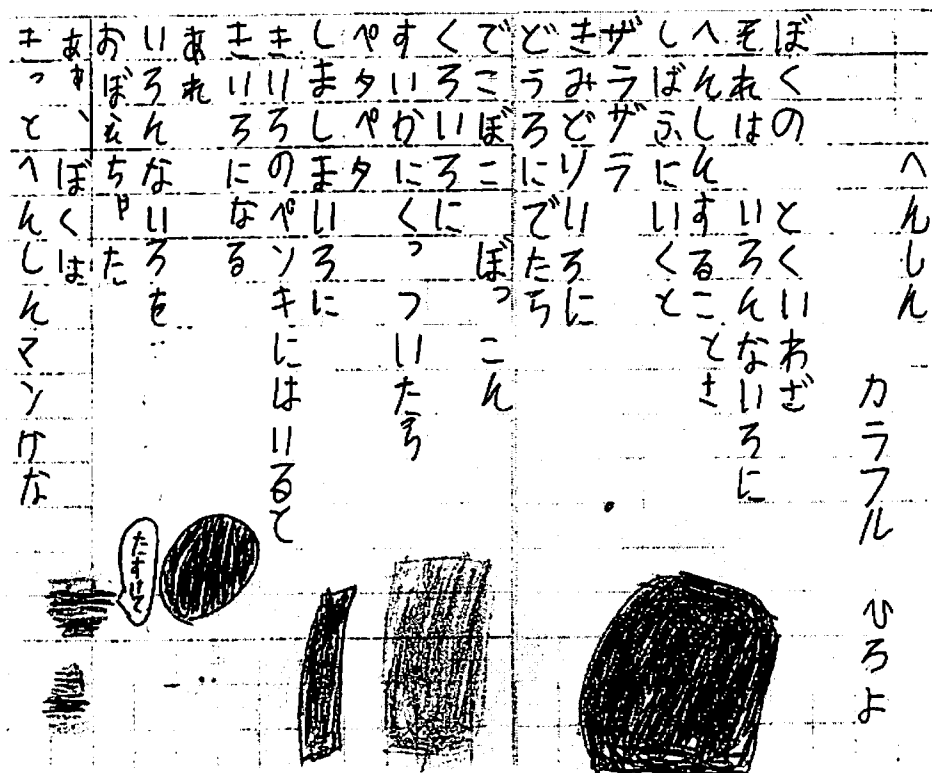
話し合いの様子

- C1 いろんな色にへんしんするところがおもしろいね。
でも、「ひかる言葉」が入っていないね。
- C2 本当だ。どこに入れたらいいかな？
- C1 いろんなところに行くから、行ったところに「ひかる言葉」を入れてみたら？
- C2 それ、いいね。
- C3 じゃあ、最初はしばふのところだね。
- C2 しばふは、ザラザラにする。
- C3 道路はどうする？
- C2 うーん。道路は、でこぼこしている。
- C1 じゃあ、でこぼこ ぼっこんとかどう？
- C2 あっそれ、おもしろい！

※このグループでは、「ひかる言葉」が入っていないことに気づき、話し合いを進めていた。

と	色	を	色	す	り	す	ぼ	
色	に	そ	の	い	色	ま	く	し
へ	な	の	や	か	に	き	の	う
ん	っ	色	ン	い	な	と	と	う
し	ち	を	き	く	ち	た	く	う
ん	り	あ	に	た	も	し	の	う
そ	た	ば	入	う	う	ば	あ	う
ン	の	あ	さ	た	さ	ふ	き	う
り	あ	ち	と	た	た	は	は	う
な	あ	は	黄	鳥	出	い	色	う
か	、	て	色	み	た	く	に	う
	ほ	う	た	む	ち	と	う	う
	く	う	な	り	く	き	ん	う
	は	フ	る	色	う	み	と	う
	ま	ん	あ	黄	色	ど	ん	う

A児の完成した作品



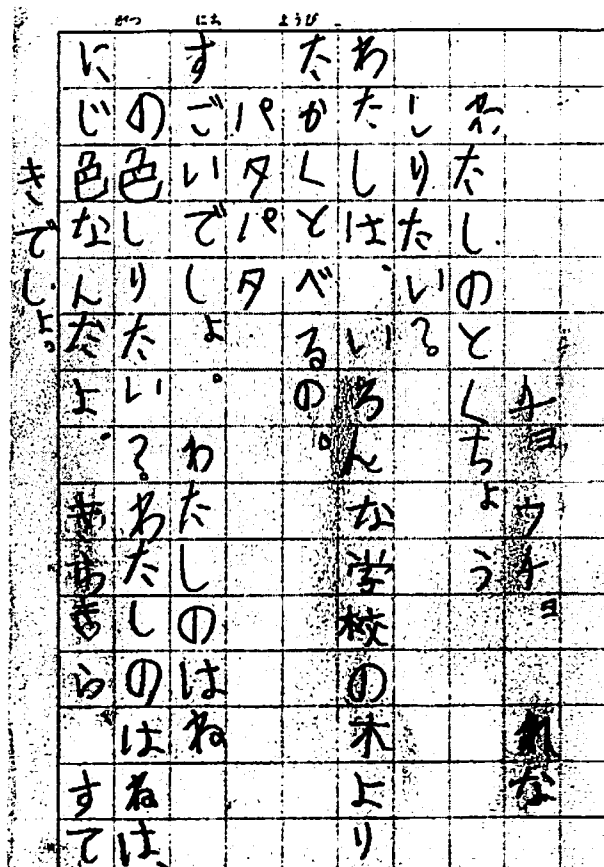
B児の作品

題材：チョウ

話し合いの様子

- C1 パタパタとかキラキラとか「ひかる言葉」
がちゃんと入っているね。
- C2 でも、もう少し工夫をしたいんだけど。
- C3 じゃあ、〇〇みたいっていう「ひかる言葉」
を入れてみたら？

※このグループでは、擬音語が入っていたので、比喩表現の「ひかる言葉」を入れようと話し合いを進めていた。



[illegible]

<仮説①>

○『のはらうた』コーナーを教室に設定した。児童は、朝の読書の時間や休み時間に進んで手に取って、読む姿が見られた。『のはらうた』を読む中で、「自分たちも早く書きたい」という声がたくさん聞えてきた。

○初めて「ポエムレストラン」を行った。相手意識がはっきりしており、自分の詩を聞きたいと言ってもらったり、詩を発表した後に感想を言ってもらったりするなど、児童は充実感でいっぱいになっていた。一回目の「ポエムレストラン」後の感想からは、「もっといろんな人に詩を聞いてもらいたい。」「次は自分が作った詩を聞いてもらいたい。」という言葉がたくさんあり、書くことへの意欲を高めることができた。

<仮説②>

○文集『ひざし』には自分と同じ学年の児童の詩がたくさん載っており、親近感を持ちながら読むことができた。児童からは、「今まで読んだことがなかったけど、とてもおもしろい。」という声が聞こえてきた。

○文集『ひざし』から「ひかる言葉」を見つける活動をした。子どもたちは、夢中になって文集『ひざし』を読み、たくさんの擬音語や擬態語、比喻表現を見つけることができた。また、見つけた「ひかる言葉」を掲示し、自分たちの詩を書く活動に生かすことができた。

○文集『ひざし』を読み、「ひかる言葉」を意識しながら書くことが多くなった。日記でも、以前よりも表現力が豊かになった。また、他教科の生活科の野菜の観察でも「ひかる言葉」を入れて書きたいという児童が増え、いろいろな言葉で表現することができるようになった。

- 文集『ひざし』を読むことで、詩を選定する力が自然に身に付いてきた。1回目の「ポエムレストラン」で紹介する詩を自分たちで選定させたところ、季節に合っているものや自分の気持ちに近いものなど詩を見つける目も養われた。
- 検証授業では、「ひかる言葉」をどこに書き加えればよいのか迷う児童がおらず、文章構成力を身に付けることができていた。また、「ひかる言葉」がある詩とない詩では、伝わり方やおもしろさが違うことに気付くことができた。

实践

—作文—

第3学年

印西市立牧の原小学校
指導者 杉本 あゆみ

1 単元名

強く心にのこったことを
～クラス文集を作ろう～

2 単元について

(1) 単元観

本単元で扱う内容について、学習指導要領には以下のように位置づけられている。

「B書くこと」の(2)内容 ①指導事項

- (1) ア 関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べること。
- イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。
- エ 文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。
- オ 文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすること。
- カ 書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと

[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]

- (1) イ 言葉の特徴やきまりに関する事項
 - (7) 言葉には、考えたことや思ったことなどを表す働きがあることに気付くこと。
 - (8) 表現したり理解したりするために必要な文字や語句を増し、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること。

本単元は、4～5月教材の「発見ノートを作ろう」と2月教材として設定されている「七強く心にのこっていることを」の内容を合わせて4月から7月教材として新設した。目標は、「身近な生活の中から題材を見つけ、段落相互の関係を考えながら、中心になる場面をはっきりさせて文章を書くこと」である。

単元を通して文集『ひざし』に掲載されている作品を参考に学習していく。その文集『ひざし』の審査会が7月にあり、優れた作品をそれに出品するために、一度この時期に指導を行い、ここで付けた力を2月に再確認しながらもう一度指導する。そして、学年最後に書いた作文は、学級文集としてまとめていく。

まず、4月に毎日の生活の中で発見したことを不思議に思ったりしたことを「発見ノート」に書く学習をし、その後も身の回りで発見したことを書いて「作文のたね」として袋に書き溜めていく。題材選びの際も文集『ひざし』を参考にしていく。そして、6月末に作文を書く時に、「作文のたね」の袋の中から選ぶようにする。

中心場面をはっきりとさせて書くためには、どんな段落構成にしたらよいのか、様子や気持ちが伝えるにはどのような言葉を使ったり表現をしたりしたらよいのかということも

文集『ひざし』を使って考えていく。特に、様子や気持ちを擬態語や比喻表現などで表した「光る言葉」を文集『ひざし』の中から探して書き抜き、「光る言葉の木」を掲示していく。

2ヶ月以上の長い期間、文集『ひざし』の優れた作品に十分に触れさせてから作文を書いていく。その際、それまで書き溜め、掲示してある「光る言葉」言葉を参考にしたり、読み手に伝えたいことが伝わるかどうか、友達と交流しながらアドバイスをし合ったりしていく。

7月に書き上げた作品については、文集『ひざし』審査会を始め、各種作文コンクールに全員のものを出品する。

(2) 児童の実態

本学級の児童は、男子9名、女子10名、計19名で構成されており、素直な気持ちで何事にも取り組むことができる。指導者が持ち上がりであり、2学年時から様々な言語活動を経験しており、それら全てに意欲的に取り組んできている。

昨年度末の千葉県標準学力検査の結果は、特に「書く」領域で平均点を上回っていた。一方、全ての境域において平均点を大きく下回る児童もあり、個人差が大きいことが課題である。

本単元を学習するにあたり、次のような実態調査を行った。結果は以下の通りである。

3年1組（調査人数 男子9名 女子10名 計19名） 【4月10日実施】

(仮説①「書こうとする力」に関連して)

① 日記を書くことは好きですか。

好き 15名 ふつう 4名 好きではない 0名

【理由】

○好きな理由

- ア・今日楽しかったことをノートに書いて未来へ残せるから。 7名
- イ・先生が返事をくれるから。 5名
- ウ・思い出して書くことが楽しいから。 2名
- エ・「光る言葉」が書けるから。 1名
- オ・字を書くのが好きだから。 1名

○好きではない理由

- カ・書くことが思い浮かばないから。 2名
- キ・たくさん書けないから。 1名

② メモを書いて作文を書くことは好きですか。

好き 9名 ふつう 9名 好きではない 1名

【理由】

○好きな理由

- ア・メモを書いたら作文に書くことが簡単だから。 4名
- イ・書くのが楽しいから。 2名

- | | |
|----------------------------|----|
| ウ・友達と読み合うことが楽しいから。 | 2名 |
| エ・いっぱい思い出があり、いろんなことが書けるから。 | 2名 |
| ○好きではない理由 | |
| オ・題材が思いつかないことがあるから。 | 2名 |
| カ・メモを書くのが上手にできないから。 | 1名 |
| キ・書くことが大変だから。(難しい) | 1名 |

(仮説②「書くことができる力」に関連して)

③ 作文や日記を書く時にどんなことに気を付けていますか。

- | | |
|-------------------|----|
| ア・「 」や句読点を正しく書くこと | 5名 |
| イ・文字の間違い | 4名 |
| ウ・長い文章を書くこと | 3名 |
| エ・「光る言葉」を多く入れること | 3名 |
| オ・文字を丁寧に書くこと | 3名 |
| カ・会話文を多く入れること | 2名 |
| キ・文末(敬体・常体) | 1名 |

(目的意識・相手意識に関連して)

④ 作文を書いたら、誰に読んでほしいですか。

- | | |
|-----|-----|
| ・先生 | 10名 |
| ・家族 | 8名 |
| ・友達 | 7名 |

(その児童なりの表現、「光る言葉」に関連して)

⑤ 誕生日プレゼントをもらいました。嬉しい気持ちを書きましょう。

- | | |
|----------------------|----|
| ア・心がドキドキしました。 | 3名 |
| イ・わくわくしてきました。 | 3名 |
| ウ・天国へ飛んで行ってしまいそうでした。 | 2名 |
| エ・大声を出したい気持ちでした。 | 1名 |
| オ・心の中でおどりました。 | 1名 |
| カ・気持ちがピカーッとなりました。 | 1名 |
| キ・まるで天国にいるようでした。 | 1名 |
| ク・心が笑いそうになりました。 | 1名 |
| ケ・うれしくなりました。 | 1名 |
| コ・心がドクッとしました。 | 1名 |
| サ・とてもハッピーでした。 | 1名 |
| シ・なんてやさしい人なんだ。 | 1名 |
| ス・すごくむねがうきうきした。 | 1名 |
| セ・うきうきした。 | 1名 |
| ソ・まるで、地球をもらったみたい。 | 1名 |

上記の調査についての個々の児童の実態は、下記の表の通りである。

- ①日記を書きことは好きか。
 ②作文を書くことは好きか。
 ③作文や日記を書く時にどんなことに気を付けていますか。
 ④誕生日プレゼントをもらいました。嬉しい気持ちを書きましょう。
 (⑤～⑧は、日記による調査である。)
 ⑤5分間に書ける行数
 ⑥会話文があるか。
 ⑦段落(はじめ—中—終わり)で段落を変えて書きなさいという指示で、正しく書けているか。
 ⑧「光る言葉」を書いているか。

	①	理由	②	理由	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
A児	好き	エ	好き	ウ	キ	コ, シ	7	×	×	×
B児	好き	イ	ふつう	キ	ア	×	8	×	×	×
C児	好き	ア	ふつう	キ	ア	ア	7	×	×	×
D児	好き	ア	好き	イ	イ	ア	6	×	×	×
E児	ふつう	カ	好き	エ	ア	サ	5	×	○	×
F児	好き	ウ	ふつう	オ	ウ	イ	4	×	○	×
G児	ふつう		好きでない	キ	エ	ウ	7	×	○	×
H児	好き	ア	ふつう	ア	エ, オ	エ	5	×	○	×
I児	ふつう	キ	ふつう	キ	ア	×	5	×	×	×
J児	好き	ウ	好き	ア, イ	オ	×	5	×	○	×
K児	好き	イ	ふつう	キ	イ	オ, ウ, カ	5	×	○	×
L児	好き	イ	ふつう	オ	ウ, カ	キ	10	×	○	×
M児	好き	ア, イ	好き	ウ	エ	セ, ソ	10	×	○	×
N児	好き	ウ	ふつう	オ	ウ	×	8	×	×	×
O児	好き	ア	好き	イ	ア	ス	8	×	○	×
P児	好き	イ	ふつう	カ	ウ	ク	6	×	×	×
Q児	好き	ウ	好き	エ	オ	ア, イ	8	×	×	×
R児	好き	イ	好き	ア	イ	イ, ケ	8	×	×	×
S児	ふつう	オ, カ	好き	ア	ア	×	3	×	×	×

以上のような結果から、ほとんどの児童は書くことが好きなことがわかる。5分間日記は、児童が2学年時からほぼ毎日続けており、日課となっている。同じます目のノートを使用しているので、書き終わった後に「何行書けたか」と競いながら、長文を書くことの楽しさを感じている児童もいた。また、同じく2学年時から毎日家庭学習で視写を続けていることもあり、会話文で改行するというきまりも概ね理解している。そのため、「日記に会話文を使うと行が増える」という理由で積極的に会話文を使う児童も増えてきている。

さらに、2 学年時後半から、「嬉しい」ではなく、「うきうきした、わくわくした」などの多様な表現についても気付かせ、「光る言葉」として書くことを勧めてきている。こちらについては、意識して書いているほとんどいない。

また、日記を書くことは好きであっても国語科の授業中に行う作文になると意欲が低くなっている。日記には自分の書きたいことを構成などを気にせず書くことができるが、作文学習では、ねらいにあった題材を探したり、構成を考えてメモを書いたりする必要がある。そのようなことに苦手意識をもっている児童が少なくないことがわかった。

児童は2 学年時から、日記や視写の他にもポエムレストラン、句会、百人一首などの様々な言語活動に大変興味深く取り組んできている。また、自分の作品を友達や教師、家族に読んでもらうことや、日々の授業で友達と相談したり話し合ったりする活動にも意欲的に取り組んでいる。反面、個別に指導を要する児童も数名おり、本単元においても能力に応じた手立ての工夫が必要である。

（3）指導観

本単元では、様子や気持ちを擬態語や比喻表現など（光る言葉）を使って作文を書くことを中心に指導していきたい。

<前半>

○「作文のたね」を袋にためる。「作文のたねの家」を教室に掲示する。

前半は、毎日の生活の中での発見や不思議に思ったことなどを児童一人一人が「作文のたね」という袋に書きためていくという活動をするが、教室内にも、「作文のたねの家」を掲示する。心の動きがある題材について生活を振り返って話し合ったり、文集『ひざし』の題材を参考にしたりして掲示をしていきたい。このことにより、作文を書くときには、その袋の中から題材を選ぶことができ、題材選びに苦勞していた児童もスムーズに学習に取り組めることと思う。

○「光る言葉」を探す。使う。

それと同時に、文集『ひざし』の作品の中から「光る言葉」を見つける活動を行わせ、「光る言葉の木」を掲示していきたい。毎日家庭学習で行っている視写の題材も文集『ひざし』の作品にし、書きながら「光る言葉」を見つけて付箋を貼らせて提出させる。また、毎日書いている日記の中にも「光る言葉」が書けた場合は、指導者が付箋を貼り、児童が書いて掲示するようにすることで、「光る言葉」を使いたいという意識を高めていきたい。

<後半>

前半の時間に4 月下旬から6 月下旬まで2 ヶ月たつぷりと時間を取ったあと、後半は、書き留めておいた「作文のたね」の中から選んだ題材について、中心となる場面をはっきりとさせて、「光る言葉」を使った作文を書き上げる活動をする。

○友達との交流活動を積極的に行う。

構成メモについて、友達とアドバイスをし合うことにより、実態調査において「構成メモを書くことが難しい」と応えた児童も意欲的に学習に取り組めるのではないかと考える。

作文を書いていく過程においても、友達との交流活動を積極的に取り入れていきたい。

【自分で書く→2, 3 人のグループで話し合う→アドバイスされたことを生かして手直しをして書く。】という活動を毎時間行っていく。このことにより、作文を苦手とする児童

にとっては何を書いたらよいかということのアドバイスを受けながら書き進めていけるし、それ以外の児童にとっても読み手の視点で様子や気持ちが伝わってこないところについてアドバイスを受けることができる。グループでの話し合いにおいては、「様子が目に浮かんでくるか」「気持ちが伝わるか」という観点で話し合いをさせる。会話文を入れたり文を入れ替えたりすることが有効であったり、「光る言葉」をに変えたりと活発にアドバイスをし合えるようにしたい。構成メモについての話し合いのときに、「書き手が中心場面としているところ、伝えたいこと」をグループの中で周知させておき、最後まで書き上げた時にそれが伝わるかどうかを話し合わせる。

○モデル文を使って、「光る言葉」を取り入れる練習をする。

各自が作文の下書きを書いた後、指導者が作った「光る言葉」のないモデル作文について、友達と話し合いをしながら、作者の気持ちが生き生きと表現されるような作文に手直しをする活動を行う。その後、自分が書いた作文についても同様の観点で手直しをさせていくことで、より意識して「光る言葉」を使うようになるのではないかと考える。その際に、教室に掲示している「光る言葉の木」を参考にさせていきたい。

このように、単元を通して文集『ひざし』に触れさせていくので、教室に文集『ひざし』コーナーを作り、どんどん読ませていきたい。自分と同じ学年の児童が書いた作文なので興味深く読むことができること考える。

3 仮説との関わり

仮説①日常的に言語活動の工夫を行うことで、「書こうとする力」が育ち、進んで表現しようとする態度が養われるだろう。

「書こうとする力」＝書こうとする意欲面（主体的に表現しようとする態度）

授業中だけでなく、日常的に様々な言語活動に触れさせ、言語を使って表現する意欲を高めていきたい。

昨年度から取り組んできた、家庭学習における視写を今年度も毎日続けることで、文字を書くことや、文章の構成の仕方に慣れさせていく。また、日直による詩の発表も毎日続けていく。詩集から選んで視写するだけでなく、自作の詩を書いて発表する児童も昨年度後半から増えてきた。書き溜めた詩を読んでもちそうする「ポエムレストラン」をすることで、「お客さんに聞いてもらうために詩を書きたい」という気持ちが高まるであろう。句会も昨年度から行ってきた。今年度は国語科の学習に合わせて、「春・夏」「秋・冬」の2回行っていきたい。

さらに、掃除後の5分間日記も続けていきたい。指導者がコメントを入れて返すことに児童は書く喜びを感じている。10行以上は書くように助言したり、書いた行数を尋ねたりすることで、長い文章を書こうとする気持ちが高まるであろう。児童は、行数を増やすために自然に会話文を入れたり、光る言葉を入れたりするようになってきているので、優れた表現は賞賛し、さらに書こうとする力を育てていきたい。

また、第一次で「作文のたね（発見ノート）」の書き方を学習した後、生活の中で関心を持ったことについて「作文のたね」の袋にためさせていきたい。

仮説②文集『ひざし』を教材として活用することで、「書くことができる力」が育ち、表現力が高まるだろう。

「書くことができる力」＝書く技術面（文章構成力、語彙力、表現の工夫をする力）

4月から、毎日の家庭学習で文集『ひざし』の文章表現の優れた作品を視写させ、それを共通教材として、「光る言葉」を探す活動をする。何作品かを視写するがそれ以外の作品も自由に読めるように教室付近に置き、文集『ひざし』コーナーを作りたい。そして、「光る言葉」を見つけたら付箋を貼るようにさせ、「光る言葉の木」に貼っていきたい。こうして言葉に目を向けさせることにより、自分が作品を書くときに使う言葉や表現についても参考資料になると考える。さらに、たくさんの作品を読むことで、題材へのヒントを得たり、文章構成の工夫をとらえたりすることができるとして期待している。

また、児童が作文の下書きを書き終えた時点で、教師が作成したモデル作文を提示し、「光る言葉」を使って書き直す学習をする。このことにより、自分の作文の文章についても、「光る言葉」を使ってより様子や気持ちが伝わるような表現に書き直すことができるであろう。

さらに、友達との交流によっての学び合いを大切にさせていきたい。書き終わってからの交流ではなく、構成メモを作る段階から書き終わって推敲する段階まで、毎時間時間を取ってアドバイスをし合うようにしていく。

4 単元の目標

【関心・意欲・態度】

- ・身近な生活の中から興味を持った題材を選び、「光る言葉」を使って気持ちを表そうとする。
- ・進んで文集『ひざし』を読み、「光る言葉」を探そうとする。

【書くこと】

- ・自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成することができる。
- ・様子や気持ちが伝わるように、「光る言葉」を使ってよりよい表現に書き直したり、文章の敬体と常体との違いに注意しながら書いたりすることができる。
- ・友達が書いた構成メモや作文を読み合い、よりよい内容にするために意見を述べ合うことができる。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

- ・「光る言葉」を集めることで、考えたことや思ったことなどを表すための言葉を増やすことができる。

5 指導計画 11時間扱い（本時10／13）

次	学習内容と学習活動	評価規準（◎）
第一 次 （ 4 ） 4月 中旬	○学習のゴールを知る。 ・文集『ひざし』を参考にして優れた表現や文章構成を学び、各種コンクールに出品するということを知る。 ○視写をした文集『ひざし』の作品で、文章構成や表現方法でよかったところ、作者が伝えたい気持ちを話し合う。 ・読み聞かせを聞く。 ・「始め－中－終わり」の文章構成をとらえる。 ・生き生きとした優れた表現「光る言葉」を探し、話し合う。 ・作者が伝えたい気持ちを話し合う。	◎学習の見通しをもち、作文を書こうとする。【関】（発言） ◎「光る言葉」を探し、サイドラインを引いている。【伝】（視写 ノート）
	○「作文のたね（発見ノート）」の書き方を知る。（3時間） ・書き方を知る。 ・関心のあることなどから題材を決めて自分の考えが明確になるように「始め－中－終わり」を考えて書く。 ・これから常時記入し、袋の中にためていくことを知る。	◎構成を考えて「作文のたね」を書いている。【書】（ワークシート）
常 時	○毎日5分間日記を書く。 ・日記を書くときに、掲示してある「光る言葉の木」を参考に表現豊かに書く。 ○文集『ひざし』の中から「光る言葉」を探す。 ・毎日、家庭学習で文集『ひざし』の作品を視写する。 ・文集ひざしコーナーにある文集ひざしを読み、優れた表現を見つけて付箋を貼り、「光る言葉の木」に掲示する。 ○何かを発見したり心が動いたりしたときに「作文のたね」に書き、個人の袋にためていく。	◎進んで文集『ひざし』を読み、「光る言葉」を探そうとする。【関】（付箋） ◎進んで「作文のたね」を書こうとする。【関】（ワークシート）
第 二 次	○「作文のたね」の中から題材を選び、作文を書く。 ・書きためた「作文のたね」の中から、	

(8) 6 月 中 旬	もっとも興味や関心が高いものを題材として選ぶ。 ・「作文のたね」で書いた構成の段落について、班の中で意見を伝え合う。 <話し合いの観点> ・「中」の部分のメモについて、思いを伝えられる内容になっているか。	◎友達が書いた構成メモや作文を読み合い、よりよい内容にするために意見を述べている。【書】(観察) ◎伝えたいことが伝わる構成メモを書いている。【書】(ノート)
	○構成をもとに、「始め」の段落の作文を書く。 ・個人で書く。 ・班でアドバイスをし合う。 <話し合いの観点> ・書き出しの工夫 ・何について書くのかがわかる内容か。 ・アドバイスされたことを参考に手直しをする。	◎「始め」の段落について、何について書くのかがわかる作文を書いている。【書】(作文) ◎文章の敬体と常体との違いに注意しながら書いている。【書】(作文) ◎友達が書いた構成メモや作文を読み合い、よりよい内容にするために意見を述べている。【書】(観察)
	○構成をもとに、「中」の部分の作文を書く。(2時間) ・個人で書く。 ・班でアドバイスをし合う。 <話し合いの観点> ・様子が伝わるか。 ・会話文は効果的に書かれているか。 ・アドバイスされたことを参考に手直しをする。	◎「中」の段落について、会話文を使ったり様子を詳しく書いたりして、中心場面での気持ちがわかるように書いている。【書】(作文) ◎文章の敬体と常体との違いに注意しながら書いている。【書】(作文) ◎友達が書いた作文を読み合い、よりよい内容にするために意見を述べている。【書】(観察)
	○構成をもとに、「終わり」の部分の作文を書く。 ・個人で書く。 ・班でアドバイスをし合う。 <話し合いの観点> ・伝えたい思いがまとめられているか。 ・アドバイスされたことを参考に手直しをする。	◎「終わり」の段落について、会話文を使ったり様子を詳しく書いたりしている。【書】(作文) ◎文章の敬体と常体との違いに注意しながら書いている。【書】(作文) ◎友達が書いた作文を読み合い、よりよい内容にするために意見を述べている。【書】(観察)
本 時	○モデル作文を表現豊かな作文にするために、掲示してある「光る言葉の木」	◎「光る言葉」を使って、よりよい文章に書き換えようとしている。

	を参考にして手直しをする。 ・自分で工夫して書き直す。 ・班でそれぞれの考えを比較して話し合い、まとめる。 <話し合いの観点> ・より様子や気持ちが伝わるような表現はどれかを比較して班の意見としてまとめる。 ・班で話し合ったことを全体で話し合う。	【関】(ワークシート) ◎様子や気持ちが伝わるように、友達と意見を述べ合いながら、「光る言葉」を使ってよりよい表現に書き直している。【書】(ワークシート) ◎様子や気持ちを生き生きと表すための「光る言葉」に気付いている。 【伝】(観察)
	○自分が書いた作文を「光る言葉」を使うという観点で手直しをする。(「中」の部分のみ) ・自分で考えて手直しをする。 ・班の友達とそれぞれの作文について話し合う。 <話し合いの観点> ・友達の気持ちやその時の様子が伝わる言葉が使われているか。	◎「光る言葉」を使って作文を推敲しようとしている。【関】(作文) ◎様子や気持ちが伝わるように、「光る言葉」を使ってよりよい表現に書き直している。【書】(作文)
	○手直しした作文の消書をする。	◎文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりしている。 【書】(作文)
第三次 (1)	○書き上げた作文を班や学級の中で発表する。 ○ひざしコンクールなどのコンクールに出品する。	◎書き方の巧みさに気付いている。 【伝】(発表)

6 本時の指導 (10 / 13)

(1) 目標

【関心・意欲・態度】

- ・指導者が示したモデル文について、「光る言葉」を使って、よりよい文章に書き換えようとしている。

【書くこと】

- ・様子や気持ちが伝わるように、友達と意見を述べ合いながら、「光る言葉」を使ってよりよい表現に書き直すことができる。

【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

- ・様子や気持ちを生き生きと表すための「光る言葉」に気付く。

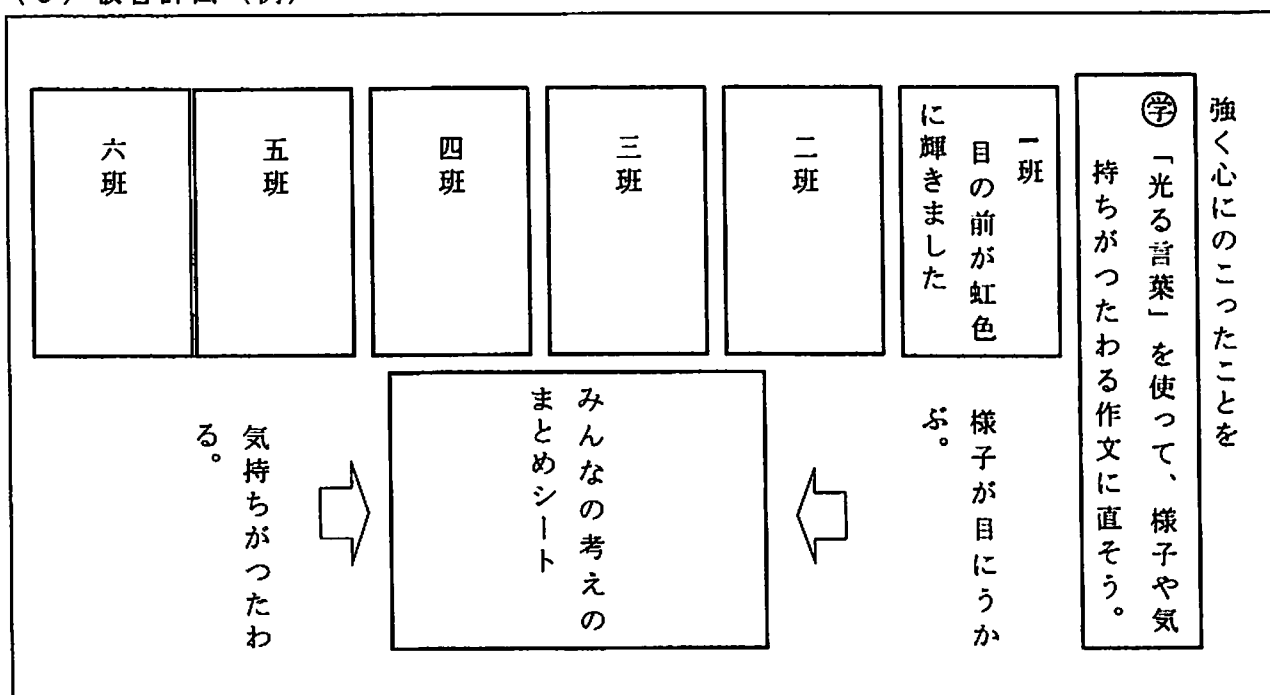
(2) 展開

○十分に満足できると判断される状況 △努力を要する状況への手立て

時配	学習内容と学習活動	指導・支援 (◇) と評価 (◎)	学習材
2	1 学習内容を確認し、本時のめあてを知る。	◇前時までに書いた自分の作文を「光る言葉」を使ってより様子や気持ちが伝わる文章に直すために、本時のモデル文を使って練習することを理解させる。	光る言葉の木
	「光る言葉」を使って、様子や気持ちがつたわる作文に直そう。		
10	2 個人でモデル文を「光る言葉」を使って手直しする。 ・うれしかったです。→目の前がばら色に輝きました。 ・悲しかったです。→目になみだがにじんできて、みんなの顔が見えなくなりました。	◇鉛筆でサイドラインを引いて直させる。 ◇教室内に掲示してある「光る言葉の木」を参考にさせる。 ◎「光る言葉」を使って修正しようとしているか。 【関】(ワークシート) ○3箇所以上、サイドラインを引いて「光る言葉」に書き直している。 △思いつかない児童には、手直しする言葉を指示し、それに変わる「光る言葉」を「光る言葉の木」から探させる。	モデル文のワークシート 光る言葉の木
15	3 各自が手直ししたことを班で話し合う。 ・みんなの考えをまとめるシートに、話し合いできたことを書き加えていく。 ＜話し合いの観点＞ ・より様子や気持ちが伝わるような表現はどれかを比較して班の意見としてまとめる。	◇全ての班の話し合いが活発に進むように、実態調査から班の構成メンバーを決定しておく。(書く力が高い児童・中ぐらいの児童・低い児童の3人組) ◎様子や気持ちが伝わるように、友達と意見を述べ合いながら、「光る言葉」を使ってよりよい表現に書き直すことができているか。 【書】(観察・評価カード) ○友達の考えに対して、自分の意見を述べるができている。 △意見を言えない児童には、出	発表シート

		ている意見の中でどの光る言葉が一番気に入ったかを述べさせる。	
1 5	4 班で話し合ったことを全体で話し合う。 ・同じ箇所にサイドラインを引いてあるものについて、「どちらの方がよいか」や「さらによくするにはどうするか」などを話し合う。	◇ 6つの班の発表シートを並べて貼り、比べながら考えさせていく。	発表シート
3	5 本時の学習を振り返り、次時の見通しをもつ。 ・自己評価カードを書く。 ・発表をする。 ・次時は、自分が書いた作文の手直しをすることを伝える。	◎ 様子や気持ちを生き生きと表すための「光る言葉」に気付くことができるか。 【伝】(評価カード) ○ 「光る言葉」を探して話し合う活動について、理解できたことを書いている。 △ 書けない児童には、板書の中から、本時で一番のお気に入りの「光る言葉」を尋ね、書かせる。	評価カード

(3) 板書計画 (例)



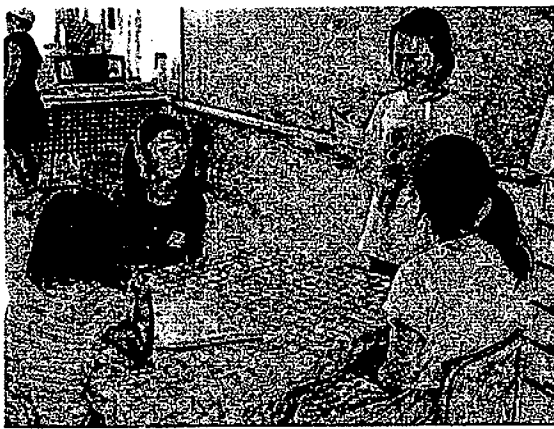
3年生の実践

仮説1について

○日常的な言語活動の工夫

<ポエムレストラン>

日直が詩を書き、帰りの会で発表をし、それをためていき学期末にお客さんを招待して「ポエムレストラン」を開いた。発表する詩は、詩集から選んでもよいし、自分で作ってもよい。休み時間に自分で作る児童が半数ぐらいいた。



他学年の児童や保護者、先生方がお客さんが来てくださり、大はりきり。発表した詩は詩集にまとめてみる。

<5分間日記>

掃除後の5分間に書くことが習慣づいた。書けた行数を競わせる他、会話文を入れたり、光る言葉を入れたりすることを勧めてきた。児童は、「楽しかったことを思い出せる」「先生に伝えてコメントをもらえる」などの思いを持ちながら、楽しんで書いている。

【資料1】

毎日の5分間日記における追跡調査と「光る言葉」さがし

⑤ 5分間に書ける行数（1行は22字）

⑥ 会話文があるか。

⑦ 段落（はじめ—終わり）で段落を定めて書きなさいという指示で、正しく書いているか。

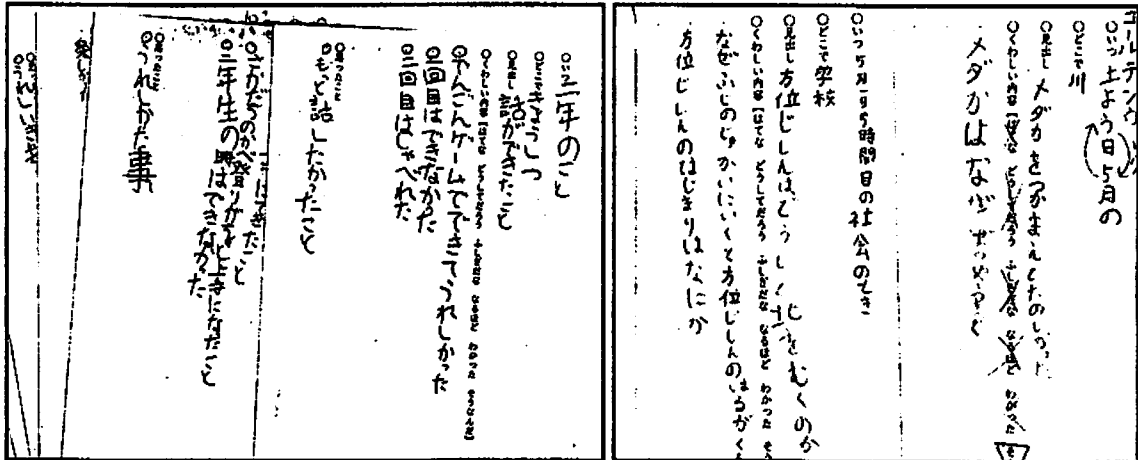
⑧ 「光る言葉」を書いているか。

★ 文芸「ひざし」から、光る言葉を見つけた数

	⑤			⑦ (始め・中・終わり)			⑧			★
	4/10	5/10	6/14	4/10	6/16	6/20	4/10	5/10	6/14	
A 児	7・×	12・○	29・○	×	○・区切りなし	○・○・○	×	×	×	8つ
B 児	8・×	8・×	6・×	×	区切りなし	○・○・○	×	×	×	なし
C 児	7・×	12・○	13・○	×	区切りなし	○・○・○	×	×	×	7つ
D 児	6・×	9・○	12・×	×	○・区切りなし	○・○・○	×	×	×	3つ
E 児	5・×	9・○	8・×	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	4つ
F 児	4・×	8・×	11・○	○	○・○・○	○・○・なし	×	×	×	6つ
G 児	7・×	10・×	15・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	9つ
H 児	5・×	6・×	11・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	2つ
I 児	5・×	8・×	7・×	×	量が少ない	量が少ない	×	×	×	1つ
J 児	5・×	7・×	13・○	○	○・○・○	○・○・区切りなし	×	×	○	3つ
K 児	5・×	9・○	12・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	5つ
L 児	10・×	12・○	42・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	4つ
M 児	10・×	8・○	19・○	○	○・○・○	○・○・○	×	×	○	6つ
N 児	8・×	15・○	12・○	×	区切りなし	区切りなし	×	×	×	1つ
O 児	8・×	11・○	12・×	○	○・○・○	○・○・○	×	×	×	5つ
P 児	6・×	6・×	18・○	×	○・区切りなし	○・○・○	×	×	○	8つ
Q 児	8・×	9・○	18・○	×	区切りなし	欠席	×	○	×	6つ
R 児	8・×	9・○	16・○	×	○・区切りなし	区切りなし・○	×	×	○	12
S 児	3・×	3・×	3・×	×	量が少ない	量が少ない	×	×	×	なし

＜「作文のたね」を袋にためる＞

生活の中で関心を持ったことはすぐさま「作文のたね」に書き、袋にためるようにした。この段階では、まだ起承転結を考えずに日常生活で不思議に思ったことや楽しかったことなどを何でも書き留めてよい。学習前の実態調査で、「題材が思いつかない」と答えていたF児、N児は、「作文のたね」の袋に何枚も書き溜め、学習後、「作文のたねが見つけれれたから今回の学習が楽しかった」と応えている。【資料3】その他にも、7名もの児童が「作文のたねが見つけれれた」と応えている。

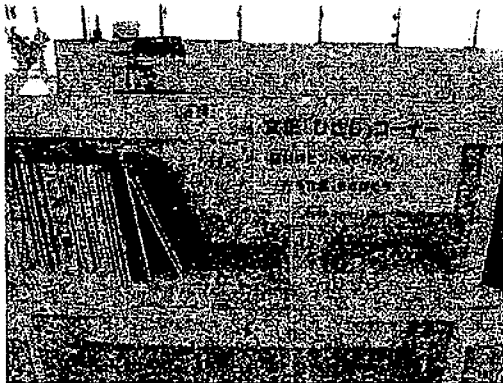


N児の「作文のたね」

F 児の「作文のたね」

仮説 2 について

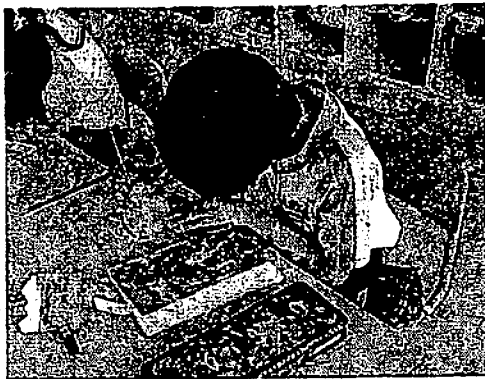
文集『ひざし』コーナーを設定し、自由に読めるような環境を作った。



＜題材選びのヒントとして使う＞

日常的に「作文のたね」の袋にためた物の中から題材を選ぶ段階で文集『ひざし』を活用した。

児童は、心の動きがあるからこそ作文の「中」が膨らむのだということを実感し、慎重に題材選ばなくてはならないながらもその難しさを感じ、悩んだ結果、必然的に文集『ひざし』にはどんな題材の作文が載っているのかを探すようになった。たくさんの作品を読みながら、その作品の起承転結をとらえ、自分が見つけた起承転結のある題材を「作文のたねの家」に掲示し、起承転結を考えた作文メモを書くことができた。



文集『ひざし』から「光る言葉」を見つけて「葉」に貼っている。



「光る言葉の木」を見て、自分の作文を直している。



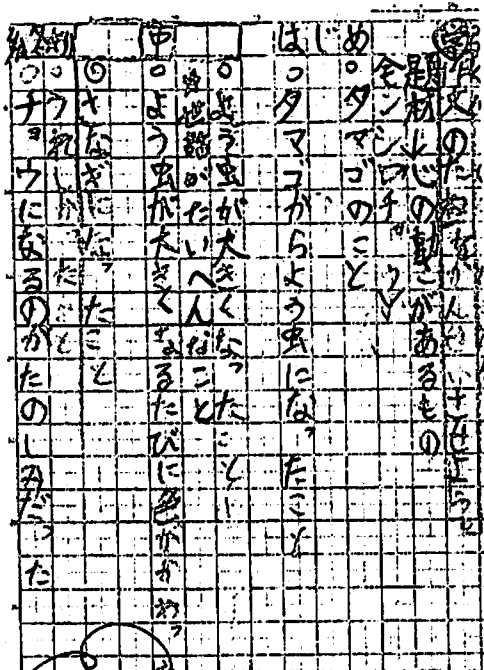
文集『ひざし』から「光る言葉」を見つけて「葉」に貼っている。

☆見つけた例

- ・手に汗をじわっとかき、方に力が入る。
- ・胸がドックドックなっていた。
- ・足がしびれたり、腕が重くなったりするくらい
- ・心臓の音がどんどん速くなってきました。
- ・跳んだりはねたりしてよろこびました。

<友達との交流活動を積極的に行う>

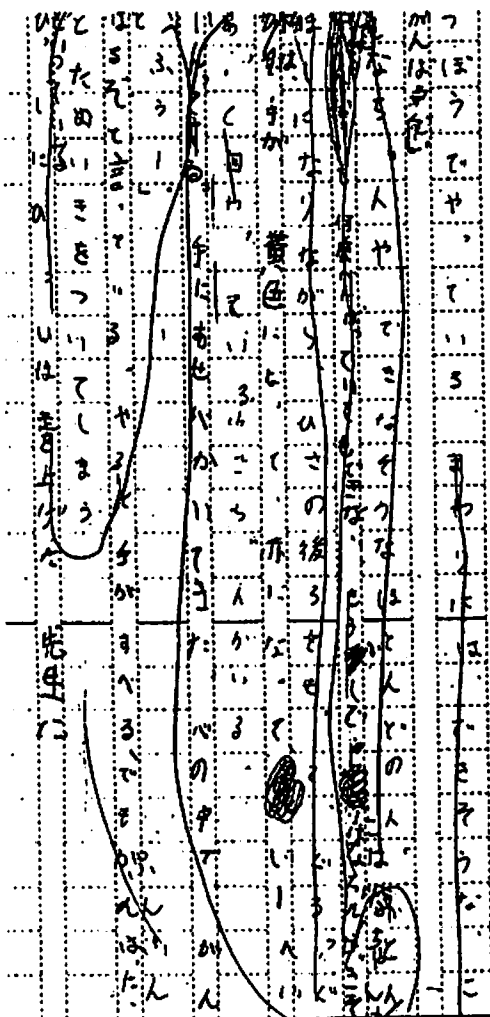
毎時間、小グループでの話し合い活動を行った。学習前の調査で、「構成メモを書くことが難しい」と応えていたP児は、グループの友達に相談しながら、起承転結を考えながら書き上げることができた。



P児の作文メモ

など質問をされ、そのことを書き加えていた。

第3学年 実践記録-17-



様子が詳しくなるように付け足した方がよい文章をアドバイスされて書き直している。

アドバイスをされ、様子を詳しく書き直している。

【ふとんほしになりながら、回っている。】



【手が黄色になって、赤になって、じいんとする。手にあせをかいだ。】



ときりまして、みんなも、ぼくも、いっしょに、
うしたから、まわりがぼかっと、少し、温かくなりま
した。とっとかんばってみると、体育館は、もっ
と温かくなりました。さむかったぼくは、温かくなりま
した。まるで、温泉に入った気持ちでした。

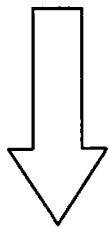
第二次に入る前から文集『ひざし』からたくさんの「光る言葉」を探していた意欲的なR児は、第二次の作文に入ってから自分で「光る言葉」を入れられていた。

「みんなもぼくもひっしでれんしゅうから、まわりがぼかっと、少し温かくなりました。もっとかんばってみると、体育は、もっと温かくなりました。さむかったぼくは、温かくなりました。まるで、温泉に入った気持ちでした。」

＜モデル文を使って、「光る言葉」を取り入れる練習をする。＞

教師の作ったモデル文を「光る言葉」を使って手直しする学習では、ほぼ全員が「光る言葉」に直すことができ、お互いの考えを合わせてグループの考えとしてまとめることができた。他のグループの考えと比べることも楽しそうであった。教室内に掲示してある「光る言葉の木」や文集『ひざし』を参考にしていた。F児、N児は、元の文に「すごく」や「必死に」などを書き加えるだけであったが、グループや全体での話し合いの中で、動作や様子で気持ちを表すと生き生きとした表現になることを学び、F児は、次時の自分の作品を「光る言葉」を使って手直しする活動では1つ書き換えることができた。【資料2】

一人で考えて「光る言葉」に直す。



グループで話し合い、考えをまとめる。



三番目に走るのは私でした。あやねちゃんからバト
 手にできました。いっしょうけんめいに走りました。
 「今までが一番速いよ。」
 と言っていました。うれしかったです。わたしは、れんくんはバトンを
 わたしました。上手にわたせてくれました。れん君は足が速いの
 で、どんどん進みました。みんながおうえんしてくれました。うれし
 かったです。れん君がゴールをしました。先生が、
 「五十五秒四。新記録。」
 と言いました。
 わたしたちは、きつとタイムが落ちると思っていたので、
 うれしかったです。とてもうれしかったです。またやりたいです。

のう、体育の時間にリレーをしました。四チームあってじゅん番にタイムをはか
 チームで、つよし君、れん君、あやねちゃんとかわしの四人です。始めに、グル
 ンばれ、
 ました。がんばりました。
 イムをはかる時間になりました。
 いしよに、Aチームがタイムをはかりました。みんなが、
 んばれ。
 っていました。Aチームは新記録でした。
 にBチームがはかりました。みんなが、
 っと手をふって、がんばれ。
 っていました。タイムがおちて、とてもやさしくなりました。
 は私たちがはかりました。わたしは、きんちょうしました。つよし君が一番に走
 んばれ。

きう、体育の時間にリレーをしました。四チームあってじゃんぽにタイムをはかっていきます。わたしのチームは、つよし君、れん君、あやねちゃんとわたしの四人です。始めに、グループごとにバトンパスのれん君ががんばっていました。私もいっしょにがんばりました。がんばりました。

タイムをはかる時間になりました。

さいしょに、Aチームがタイムをはかりました。みんなが、がんばれ。」

言っていました。Aチームは新記録でした。とてもよろこんでいました。Aチームのみんなが、いっしょにがんばっていました。えがおではなっています。

次にBチームがはかりました。みんなが、

と手をふって、がんばれ。」

次はCチームがはかりました。みんなが、

「もつと手をふって、がんばれ。」

と言っていました。タイムがおちて、とてもくやしそうでした。

次にわたしがはかりました。わたしは、きんちゃん、つよし

きう、体育の時間にリレーをしました。四チームあってじゃんぽにタイムをはかっていきます。わたしのチームは、つよし君、れん君、あやねちゃんとわたしの四人です。始めに、グループごとにバトンパスのれん君ががんばっていました。私もいっしょにがんばりました。がんばりました。

タイムをはかる時間になりました。

さいしょに、Aチームがタイムをはかりました。みんなが、

がんばれ。」

言っていました。Aチームは新記録でした。とてもよろこんでいました。Aチームのみんなが、いっしょにがんばっていました。えがおではなっています。

次にBチームがはかりました。みんなが、

と手をふって、がんばれ。」

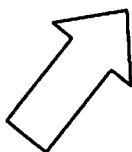
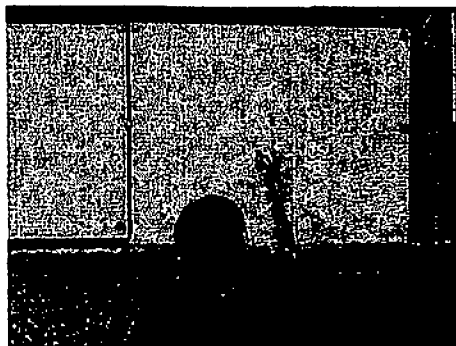
次はCチームがはかりました。みんなが、

「もつと手をふって、がんばれ。」

と言っていました。タイムがおちて、とてもくやしそうでした。

次にわたしがはかりました。わたしは、きんちゃん、つよし

すべての班のまとめたシートを並べて比較し合い、3の1で1つにまとめる。



P児の作文

単元に入る前の実態調査では、「メモを書くのが難しい」という理由で作文を書くのは、「ふつう」と応えていた。作文を書き始めた1時間目は、メモを無視した内容で書いていることを友達に指摘され、アドバイスを受けながら書き直しをした。メモに書いた柱で書いていくということを理解すると、その次の時間からは会話を入れたり周りの様子を入れたりしながら詳しく書き進めていた。グループの友達にも積極的にアドバイスをもらって手直しをしたり、「光る言葉」を使ったりしながら、楽しく書きあげることができた。学習後のアンケートでは、作文学習が楽しかったと応えている。

「ひざし」原稿用紙(小学校二・二・三学用)

次の日の朝 赤くな、たまたまからよつちが生ま
れました。糸のように小さくて、わたしの心は、大
切に育てようという気持ちで、はい、になりました。
次の日の朝、わたしはすぐに、そのままだと見え
ました。大きくな、ていまして、色も青緑色にかわ
りました。たまに、たまに、とうめいなようち
にな、ていまして。また次の日も、その日の日、ど
んどん大きくなり、色もこくなりました。
す、い、な、あ、
わたしは、ようちのかこの、そう、い、え、な、が、う、た、だ

「ひざし」原稿用紙(小学校二・二・三学用)

がんば、たねモンシロナ、ウ
牧の原
三年..
今日の理科は、モンシロナ、ウのたま、を育てる
ばんきょうてした。(モンシロナ、ウになるまで、そ
だてられるかな、わたしは、きこして、い、ました。
たまに、は、きこ、した、お、は、き、み、たい、した。(生
ま、れる、のか、わたしは、わくわくと、さん、う、う、
い、は、い、した。(早く大きくな、てね、これから
よろしく、と、心のすて、い、ました。

「ひざし」原稿用紙(小学校二・二・三学用)

「かりんちゃん」の、きんぎの羽の形が、すけ、見えるよ
と、言われて、見ると、ちよこ、と、だけ、見、え、ました。
その、その、大人になるんだね、がんば、て、ね、
と、小さく、きこ、え、ました。う、は、小さく、よう、き、
大きく、な、て、色が、み、じり、にか、わ、て、い、て、ま、な、き
に、なる、ころ、には、この、ま、な、き、の、ま、が、モンシロナ、ウ
にな、て、る、んだ、よ、ま、し、み、にな、て、ま、し、た。
早く、早く、モンシロナ、ウ、にな、て、ね、
と、この、中、で、ま、い、ました。心、が、ドキ、ドキ、と、わ、く、
と、い、る、よう、で、した。ふ、し、ぎ、に、ま、な、き、にな、た、こ、を

「ひざし」原稿用紙(小学校二・二・三学用)

ち、こ、そう、ま、し、て、い、ました。
理科の、じ、き、よう、の時、そう、い、ま、し、よう、と、ま、か、こ
も、見、え、ると、大、き、か、た、ち、が、ま、な、き、にな、て、い、ました。
う、あ、あ、す、い、い、
すぐに、先生、につ、た、え、ました。先生は、紙、に、記、ろ、く、し
他、に、ま、な、き、にな、て、い、る、人、い、る、か、
と、聞、きました。すると、他の、は、ん、の、人、が、
「一、び、き、だけ、い、ました」
と、言、い、ま、し、た。みんな、に、こ、に、こ、し、て、い、ま、す
う、れ、しく、て、い、は、ね、な、が、ら、ま、な、き、を、見、て、い、ろ、と

友だちとよろこびあいました。さなきはなはれがな
いからしきでした。わたしは心のすて。（がんば
てね。さなきさん）とまいました。よつめたさが
くねくね動いていました。わたしは小声で
「がんばりなさい」
とわら、アしまいました。
はねがは、きりとして先生が、
「さなき、これいぞうこに入れとくね。
と先生がまいました。」

「がんば、たね。あと一ひき。」
「うー、びよのさなきも動きます。バリ、わたしと
友だちは、おとうかばないくらの声もきく
べ、たね。」
「手をたたきました。わたしがおそだてた子は、どて
もはやく羽のびました。次の日に、うにがしまし
た。うにうにとんでいき、星のようににかがやいてい
ました。たまごからせいせいの虫になつて、本当によか。た
です、またその子たちと会つて、その子たちのたま
ごをそだてたいです。」

がんばったかな？カード「光る言葉」

名類

○よくできた ○少しできた △できなかった

	自分で見つけられたか	話し合いで意見を言えたか	感想
7/3			光の量を人に 伝えることが 大変だった
7/4			光の量を測るの が難しいと思 った

【追跡調査】

- ①構成メモを作る時間 … 内容、助言できていたか。
 ②作文を書く時間（始め） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ③作文を書く時間（中） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ④作文を書く時間（中） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ⑤作文を書く時間（終わり） … 内容、光る言葉があるか、助言できていたか。
 ※内容（必要な会話文ある、様子が詳しい、気持ちが伝わる）
 ⑥モデル作文について光る言葉に直す時間…いくつかの言葉を直せたか、話し合いができていたか。
 ⑦自分の作文について光る言葉に直す時間…いくつかの言葉を直せたか、助言できていたか。

継続児童。友達との関わりも苦手。話し合いはできないが、作文を見せていた。

B児	E児
①教師と共に	①○ ◎
②教師と共に	②△ 1つ ◎
③教師と共に	③△ 1つ ○
④一人で詳しく書けるようになった。	④○ 1つ ○
⑤○なし△	⑤◎ 1つ ○
⑥2つ ○	⑥1つ ○
⑦2つ ○	⑦1つ ○

K児

①○ ◎
②○なし ◎
③○ 1つ ◎
④○ 2つ ◎
⑤○なし ○
⑥6つ ○
⑦2つ ○

友達のアドバイスにより、周りの様子を一人で詳しく書けるようになった。

継続児童。話し合いはできないが、作文を見せていた。

N児	Q児
①○ △	①△ ◎
②◎ 1つ △	②○ 2つ △
③◎なし △	③△ 1つ △
④○なし △	④△なし △
⑤◎なし △	⑤△ 1つ △
⑥なし	⑥4つ
⑦なし	⑦なし

S児	G児
①教師と共に	①○ ◎
②教師と共に	②○なし ◎
③△なし △	③○なし ◎
④○なし △	④◎ 1つ ◎
⑤○ 1つ △	⑤◎ 1つ ◎
⑥1つ	⑥1つ
⑦1つ	⑦1つ

F児

①○ ◎
②○なし ◎
③○なし ◎
④○なし ◎
⑤○なし ◎
⑥なし
⑦1つ

中心場面を考えずに書いてしまう。

友達がメモと合わせながらアドバイスをしてくれたので1時間目に修正。その後は問題なし。

P児	O児
①○ ◎	①○ ◎
②メモを無視◎	②○なし ◎
③○なし ◎	③◎なし ◎
④◎ 1つ ◎	④○なし ◎
⑤◎ 1つ △	⑤◎ 1つ ◎
⑥2つ	⑥2つ
⑦1つ	⑦3つ

J児	I児
①◎ ◎	①△ ◎
②◎ 1つ ◎	②△なし ◎
③○ 1つ ◎	③△なし ◎
④○ 1つ ◎	④○なし ◎
⑤◎ 2つ ◎	⑤△なし ◎
⑥2つ ◎	⑥2つ ◎
⑦2つ ◎	⑦なし

H児
①○ ◎
③○なし ◎
③△なし ◎
④○なし ◎
⑤欠席(家庭で)
⑥2つ
⑦1つ

M児
①○ ◎
②○なし ◎
③◎ 2つ ◎
④○ 2つ ◎
⑤◎ 3つ ◎
⑥3つ
⑦3つ

D児	R児
①○ ◎	①○ ◎
②○なし ◎	②◎ 1つ ◎
③○ 1つ ◎	③◎ 3つ ◎
④○ 2つ ◎	④○ 2つ ◎
⑤◎ 1つ ◎	⑤◎ 2つ ◎
⑥2つ	⑥3つ
⑦2つ	⑦なし

A児	C児
①◎ △	①○ △
②◎ 3つ ○	②○なし ◎
③○なし △	③○ 1つ △
④○なし △	④○ 1つ ○
⑤◎なし ◎	⑤◎ 1つ ○
⑥3つ	⑥1つ
⑦4つ	⑦2つ

L児
①◎ ◎
②◎ 1つ ◎
③◎なし ◎
④○なし ◎
⑤○ 1つ ◎
⑥1つ
⑦3つ

【資料3】

【学習終了後 調査】

3年1組（調査人数 男子9名 女子10名 計19名） 【7月15日実施】

（仮説①「書こうとする力」に関連して）

② 今回の作文の学習は楽しかったですか。

楽しかった 19名 ふつう 0名 楽しくない 0名

【理由】

○好きな理由（複数回答）

ア・「作文のたね」を考えられた。 8名

イ・文集『ひざし』を読んだから。 16名

（ア）「作文のたね」が見つけれられた。 3名

（イ）光る言葉が見つけれられた。 7名

（ウ）作文の書き方のヒントがわかった。 3名

（エ）作文の中に「事件（山場）」があつておもしろかった。 1名

（オ）いろいろな作文を読めた。 3名

ウ・友達と相談し、直しながら書けたから。 16名

エ・「光る言葉」を入れられたから。 10名

オ・前より上手になったから。 16名

（ア）「光る言葉」を入れられた。 9名

（イ）周りの様子なども入れて詳しく長い文章を書けた。 4名

（ウ）会話文の改行ができるようになった。 1名

（エ）会話文をたくさん書けた。 2名

（オ）「中」の部分詳しく書けた。 1名

（カ）メモの順番で書けた。 1名

カ・教師の作ったモデル作文を直したから。 8名

キ・思い出を思い出しながら書けるから。 5名

ク・みんなに伝えたいことが伝えられるから。 5名

（仮説②「書くことができる力」に関連して）

③ 作文や日記を書く時にどんなことに気を付けたらよいですか。（複数回答）

ア・会話文を長く書きすぎない。 2名

イ・「 」や句読点、段落の改行を正しく処理すること 6名

ウ・始め—中—終わりの段落に分けて書くこと 5名

エ・会話文や気持ちを書くこと 3名

オ・伝えたいことを考えて、長くしすぎないこと 1名

カ・「光る言葉」を多く入れること 3名

キ・書きたいことはあつたらすぐ書くこと 1名

調査についての個々の児童の実態は、下記の表の通りである。

②今回の作文の学習は楽しかったですか。

③作文や日記を書く時にどんなことに気を付けたらよいですか。

	②	理由	イの具体的な内容	オの具体的な内容	③
A児	楽しかった	ア, イ, ウ, エ, オ	(ア)	(ア)	ア
B児	楽しかった	オ		(イ)	無回答
C児	楽しかった	イ, ウ, エ, オ	(イ)	(ウ)	イ
D児	楽しかった	イ, ウ, オ	(オ)	(ア)	イ
E児	楽しかった	ア, イ, ウ, オ	(イ)	(イ)	ウ
F児	楽しかった	ア, イ, ウ, オ	(ア)	(エ)	エ
G児	楽しかった	ア, イ, ウ, エ, オ	(イ)	(オ)	カ
H児	楽しかった	イ, ウ, オ	(ウ)	(カ)	オ
I児	楽しかった	イ, ウ, オ	(エ)	(イ)	キ
J児	楽しかった	イ, ウ	(ウ)		カ
K児	楽しかった	ア, イ, ウ, エ, オ	(イ)	(ア)	ウ
L児	楽しかった	イ, オ	(ア)	(ア)	イ
M児	楽しかった	ウ, オ		(ア) (イ)	イ
N児	楽しかった	ア, イ, ウ, エ	(イ)		ウ
O児	楽しかった	イ, エ, オ	(イ)	(ア)	イ
P児	楽しかった	ア, イ, ウ, エ, オ	(イ)	(ア) (エ)	エ, カ
Q児	楽しかった	ア, イ, ウ, エ, オ	(オ)	(ア)	ア
R児	楽しかった	イ, ウ, エ, オ	(ウ)	(ア)	イ, エ
S児	楽しかった	イ	(オ)		無回答

第3学年実践についての成果と課題

<仮説1>

○毎日家庭学習で240字の視写を行った。文字を丁寧に書くことに慣れ、原稿用紙の使い方や段落構成を学んでいけるだけでなく、教科書以外の物語や詩、俳句など様々な文章に触れることができた。

○「日直による詩の発表」も子ども達の好きな活動である。好きな詩を詩集から選び、好きな理由とともに、帰りの会で毎日発表してきた。自分で詩を作ることも大好きで、言葉を楽しみながら、素直な気持ちを詩に表し、発表していた。1学期末には、「ポエムレストラン」を行った。

○毎日、掃除の後の5分間に「日記タイム」を取り、タイマーで時間を計り、書けた行数や会話の数、光る言葉の数などを競ってきた。個人差はあるものの書ける行数は増えた。

<仮説2>

○文集『ひざし』には自分と等身大の作品が載っているので、内容を楽しみながら休み時間にも進んで読んでいた。さらには、「第1号から読んでみたい。70年前の戦後はどんな作文を書いていたんだろう」と関心が膨らみ、「ひざしの子ら」を夢中に読み、戦後の子ども達の生活を感じることができていた。

○文集『ひざし』の作品を視写させることにより、共通教材となり、文章構成や伝えたいこと、光る言葉などについてを分析することができた。

○文集『ひざし』コーナーで自由に『ひざし』を読み、見つけた「光る言葉」に付箋を貼ったり、「光る言葉の木」に掲示したりすることができた。徐々にではあるが毎日書いている5分間日記にも「光る言葉」を使うようになってきた。作文を書く過程では、掲示してある「光る言葉の木」を参考にしている児童も多く見られた。また、「光る言葉」だけでなく、文集『ひざし』からは、心が動く題材のヒントや文章構成の工夫も学ぶことができた。

○交流活動を積極的に取り入れ、作文を書く段階でも友達とアドバイスし合いながら書き進めてきたことにより、特別な支援が必要な児童も安心して学習ができ、作文のついでに関心が高まった。

春・夏 句会 七月

名前

一番すぐれた俳句だと思うものに一つに◎、次に上手だと思う俳句三つに○をつけましょう。

番号																			番号
点数																			点数
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
雨がふる さくらがおちる おわりだな																			
さくらの木 けむしがぼとつ 頭にな																			
かぶと虫 どすんとふんばり たたかうぞ																			
春になる 雪とけ始め 温かだ																			
天の川 きらきらひかつて きれいだね																			
春の夜 きらきらかがやく 星の空																			
夏休み 花火びかびか きれいだな																			
夏の海 みんなで入ると きもちいいな																			
さくらさく もも色じゅんたん すてきだな																			
帰り道 ランドセルおもい つかれたな																			
夏休み かき氷食べて 生き返る																			
プールでね ワイワイワイワイ さけんでる																			
暑い海 あせがだらだら すいかみたい																			
天の川 いなかの空に 広がるよ																			
おまつりの しやてきでバンとうちたおす																			
友だちと バシヤバシヤとね 泳いだよ																			
たんぽぽの わたげふわふわ とんでゆく																			
青空が 雲いちめんに 広がった																			
さくらさく きれいだ まんかい えがおもね																			

③⑧ ③⑦ ③⑥ ③⑤ ③④ ③③ ③② ③① ③⑩ ②⑨ ②⑧ ②⑦ ②⑥ ②⑤ ②④ ②③ ②② ②① ②⑩

ランドセル これからよろしく 六年間
 日やけして 体が真つ赤 プールでね
 ハチがいる 黒があぶない さされるな
 わかれた日 友だちみんな 泣いている
 お花見を さくらの下で すぐやろう
 ランドセル パチパチがんばれ 行ってきます
 春の日は 夕日がかくれ しずかだな
 春休み 家族で花見 たのしいな
 天の川 星がいつばい 流れてる
 虫や虫 空にはばたけ 仲間たち
 黒の空 火の花がさく 見に行くぞ
 かぶと虫 りっぱなつので たたかうぞ
 かき氷 暑い日には おいしいな
 一面を 黄色くそめるの 菜の花だ
 ひばりさん 美しい声でなぜ ないているの
 泳いでて バタバタあたる 水しぶき
 この花火 赤色 黄色 すごい音
 ランドセル ぴかぴかかがやく たからもの
 たんぽぽが ひらりひらり 光ってる

きのう、体育の時間にリレーをしました。四チームあってじゅん番にタイムをはかっていきます。わたしのチームはCチームで、つよし君、れん君、あやねちゃんとわたしの四人です。始めに、グループごとにバトンパスのれん習をしました。がんばりました。

タイムをはかる時間になりました。

さいしよに、Aチームがタイムをはかりました。みんなが、

「がんばれ。」

と言っていました。Aチームは新記ろくてした。とてもよろこんでいました。

次にBチームがはかりました。みんなが、

「もつと手をふって、がんばれ。」

と言っていました。タイムがおちて、とてもくやしそうでした。

次に私たちがはかりました。わたしは、きんちょうしました。つよし君が一番に走りました。わたしは、

「がんばれ。」

と言いました。二番目はあやねちゃんです。つよし君からバトンをもらう時に、あやねちゃんはバトンをおとししまいました。わたしはくやしかったです。見ているみんなが、

「あやねちゃん、あきらめないでがんばれ。」

と言っていました。

三番目に走るのは私でした。あやねちゃんからバトンをもらいました。上手にできました。いっしょうけんめいに走りました。先生が、

「今までで一番速いよ。すごいよ。」

と言っていました。うれしかったです。わたしは、れんくんにバトンをわたしました。上手にわたせてうれしかったです。れん君は足が速いので、どんどん進みました。みんながおうえんしてくれました。うれしかったです。れん君がゴールをしました。先生が、

「五十五秒四。新記ろく。」

と言いました。

わたしたちは、きっとタイムが落ちると思っていたので、びっくりしました。とてもうれしかったです。またやりたいです。